

論文

ヒトの全体像を求めて ——身体とモノからの発想——

川田 順造

1. 緒言

本稿は、筆者がこれまで部分的に発表してきた、文化をもつ生物としてのヒト (*Homo sapiens*) についての論攷に新しい考察を加えて、過去、現在、未来に亘る一つの視野に統合し、筆者が年来志向して来た自然史の一過程としてヒトとその文化を捉える立場から、「ヒトの学」に、探究の現段階での全体的見通しを与えようとする試みである。その際、生物学的ヒト学を志して大学で学び始めた筆者が、関連論文を発表してはいたが、この機会に改めて主張として述べておきたい、身体とモノからの発想に重点を置く¹。

身体については、ヒトを他の生物と共通の視野で、「知覚＝運動有機体」(sensorimotor organism) の一つと見て、その中でのヒトの文化の特徴を明らかにする。そのために、文化を生む基盤でありながら、文化によって条件づけられてもいるヒトの身体を、身体技法の側面から考察し、身体技法と感性とに基づく文化研究の理論化を試みる。

身体技法 (仏 *techniques du corps*; 英 *techniques of the body*) という考え方は、初めフランスの社会学者マルセル・モースによって提唱されたが (Mauss 1950(1936))、身体の使

¹ 「身体とモノ」をめぐる筆者が発表したものは枚挙に遑ないが、日本で言及する機会がなかったいくつかを挙げる。1973~1975年、オート・ヴォルタ(1984年以後ブルキナファソ)での技術協力「開発のための伝統的技術」の調査で、120の村を訪ねて302点の農具や日用品を調査資料と共に収集し、*Technologie voltaïque* (オート・ヴォルタの技術) A4判49頁と図版8枚タイプ印書の小冊子を1975年、現地博物館の刊行物として刊行。好評で間もなく増刷したが、作業におけるアフリカの人達の身体の使い方に目を開かれたのも、この時の現地調査による。1984年国名がブルキナファソに変わった機会に、改訂版を刊行。1980年9月、パリの高等研究院に招かれて身体技法についてのゼミを行い、注2に名を引いた研究者と知り合った。1996年3月、フランスのサンジェルマン・アン・レイで開かれたフィセン財団主催の国際シンポジウム“Techniques du corps”で運搬・手仕事における日本・アフリカ・フランスの身体技法の比較を発表。1997年7月、メキシコのガダラハラで「自然と文化」をテーマにした国際記号論学会第7回大会に招かれ、“Le corps humain: charnière entre nature et culture”(人体:自然と文化の結節点)と題して特別講演。2002年9月東京での国際人類学民族学会議中間会議で、シンポジウム“Human Body, Appliances and Technological Cultures”を招集、“Three Models of Technological Cultures: Focus on Relations between the Human Body and Tools”と題して発表した。最近では2009年11月アルザスでの『人体と身体性』をテーマにした国際シンポジウムで「人体の使い方と自我意識の発達」と題した日本語の発表を行い、論集は法政大学国際日本学研究所から2010年に刊行されている。他に日本語で刊行したものでは、2008年1月道具学会での特別講演「ヒトとモノの関わりについて考える」がある(川田 2008: 205-228)。

い方が如何に社会によって条件づけられたものであるかという指摘と、それをめぐる初次的な問題提起にとどまっており、また、その一面的な「社会」至上主義が批判されもしてきた(Douglas 1970; Blacking 1977)。豊かな示唆を含むモースの身体技法論のその後の展開において、筆者に不可解なのは、ほとんどすべての考察が身振りによる表現・伝達や、文化の中の身体象徴性に向けられ、身体技法が関わっている重要な領域である道具、住居を初めとする物質文化や技術との関連を問題にした研究が、皆無に近いことである。僅かに、ルロワ＝グーラン(Leroi-Gourhan 1943, 1945, 1965)、オードリクール (Haudricourt 1948)、ク克蘭(Koechlin 1971)、バルフェ(Balfet 1973)、シゴー(Sigaut 1984) 等フランス人研究者の仕事に、早い段階でのこの領域への接近が見られる²。

他方、モースより早く、彫刻における様式研究との関連で、条件づけられた運動連鎖としての身体の使い方に注目した人類学者に、アメリカのフランツ・ボアズがある (Boas 1955(1927))。ボアズは、北米北西部先住民の木彫における様式が、彫刻者の「運動習慣」(motor habit)によって保証されていることを指摘した。これは本稿で取り上げる観点にある意味では近いが、限定的に過ぎる。筆者は「身体技法」という語を、本稿の目的に沿って「地域によって異なるヒトの身体特徴、および地域の生態的文化的特性によって条件づけられた身体の使い方」を指す語として、筆者の観点から再定義して用いる。

また感性の領域では、特に皮膚感覚とその特殊化した一部である嗅覚を重視し、諸感覚間の層序的關係、及び「共感覚」(synesthesia)が、ヒトにとって持つ意味を検討する。

2. 身体が文化を生む

2-1. 予備的考察

言語、道具をはじめとするヒトに特有の文化は、ヒトの身体が生み出したものである。そのような身体が獲得されるまでにヒトが辿った過去を、まず概観しておく。

46億年の地球の歴史で、海が生成しそこに生命が生まれたのは約40億年前、生物の最も基本的な構成単位とされる細胞の内、真核細胞が誕生したのが21億年前、最初が多細胞生物の出現が10億年前、三胚葉生物が海中に生まれたのは5億年前、そして約3億6000万年前の古生代に、脊椎動物(両生類)が上陸、将来のヒトの言語能力の前提ともなる、水呼吸から空気呼吸への転換が起こる。そして中生代の2億年前頃、哺乳類が誕生したとされている。

比較解剖学者三木成夫によれば、ヒトの胎児が母の胎内で浸り、飲み続ける羊水の組成は、古代の海水の組成と酷似する(三木 1983: 66)。また、ヒトの胎児が成長段階によって示す姿は、デボン紀の初め上陸と海棲の二者択一を迫られた時期の古代魚類を示す受胎32日目の相貌(図1)から、受胎34日目の両生類の面影を宿す段階(図2)、36日目の上陸を完了した原始爬虫類(図3)、受胎38日目の原始哺乳類(図4)、受胎40日体長20mm、もはやヒトと呼んで差し支えない顔(郷津晴彦画)(図5)、受胎60日体長45mmの全身像(図6)に至る諸段階を示す(三木 1983: 107-117)。これは、後にも本節(2-2、5頁)「生態学と働態学」

² ク克蘭はパリで、Centre de Recherche et de Documentation sur la Réalité Gestuelle des Sociétés Humaines を主宰し、*Geste et Image* と題した雑誌を刊行しているが、これには実用的技術の面での身体技法に関する調査研究も多く載せられている。

の項で述べるヘッケルが19世紀半ばに唱えた「個体発生は系統発生を要約して示す」という主張を裏付ける事例と見ることもできる。

三好達治は処女詩集『測量船』(1930)に収められた「郷愁」で、「海よ、僕らの使ふ文字では、お前の中に母がある。そして母よ、仏蘭西人の言葉では、あなたの中に海がある」と記したが、母の胎内にも、生まれた後のヒトの「血潮」にも、水呼吸時代の海の記憶は宿っているのであろう。

恐竜類が繁栄していた中生代の間、哺乳類は小型で夜行性の動物と考えられていたが、最近では樹上性、水生、滑空性を示す化石が発見され、かつて考えられていた以上に多様化が進んでいたことが明らかになって来た(国立科学博物館(編)2010:19)。

恐竜類の絶滅後、白亜紀末期から第三紀初頭の原始的な哺乳類は、急激な適応放散を遂げた。現生の有胎盤哺乳類のうちの「真主齧類」に含まれる霊長類は、白亜紀後半に他の哺乳類から分岐したらしい。初期の原始的哺乳類の中で現在まで生き残っているグループはほとんどないが、霊長類はその数少ない系統の一つである。初期霊長類を他の哺乳類と区別する特徴は、手足の把握能力と立体視の獲得とされているが、こうした形質が霊長類で発達した舞台は、樹上、それも小さな枝の先端部だった(高井 2007:17)³。

このように、樹上生活が適応進化の結果霊長類にもたらした、前肢拇指の対向性と、前向きに並んだ両眼で近くの対象を的確に識別する視力に加えて、枝渡りに伴う「息こらえ」(air trapping)の能力は、後に樹上生活を離れて直立二足歩行をするようになったヒトの祖先が、手で物を見ながら道具を作ることや、息による音のコミュニケーションを多様化する能力の、重要な前提となったと考えられる。

2001年、中部サハラ南縁のチャドで発見された *Saheranthropus tchadensis* (図7)によって、ヒトの遠い先祖の直立二足歩行の起源は、700万年前まで遡ることになった。長い樹上生活の後、他の霊長類と別れて地上で生活するようになった原因や状況はまだ解明されていないが⁴、直立二足歩行によってヒトの祖先が得たものは、とくに次の3点に要約される。これら3点は、相互に密接に関連しているが、いずれも直立二足歩行の開始からかなり後になって、その結果としてヒトの特質となったものである。

(1) 直立した歩行と、自由になった前肢とによって、相当の容積と重量のものを、長い距離運べるようになった。筆者は、従来十分に強調されていなかったように思われるこの特質から、ヒトを *Homo ludens* 「遊ぶヒト」(ヨハン・ホイジンガ)、*Homo hierarchicus* 「階層化好きのヒト」(レイ・デュモン)など、学名以外の綽名で呼んだ先人に倣って、*Homo*

³ ゴリラ研究を始め、霊長類研究の第一人者である畏友山極寿一からは、本稿の執筆に当たって多くの貴重な個人的教示を受けた。

⁴ エチオピアで諏訪元が発見し、その後の発掘結果も加えて1995年に新しい属名を伴って記載された *Ardipithecus ramidus* は、さまざまな点で、ウッドランド適応型の類人猿と、サバンナ適応型の *Australopithecus* 属との中間的な特徴を示している。類人猿のように地上でのナックル歩行をせず、完全な直立二足歩行を行ったと思われる一方で、足の拇指が極めて長い上に対向性がある樹枝を掴みうる、咀嚼器もサバンナ型草食の *Australopithecus* 属のように頑丈ではなく、チンパンジーのような果実食のものに近いなどの特徴を示している(2011年2月6日、東京大学での日本学会公開シンポジウム『ヒトの社会と愛——ラミダス猿人化石からわかること』での諏訪元の講演による。文責筆者)。日本人類学会の大会で毎年報告される、霊長類の直立二足歩行への移行を可能にしたアフリカの自然条件についての考察からも、未だ議論が多様であることが窺える。

portans 「運ぶヒト」と呼びたい。実際、*Homo faber* 「作るヒト」(古代ローマのアッピウス・クラウディウス・カエクス以来、アンリ・ベルクソン、ハンナ・アーレント等、現代まで多くの人々に用いられて来た語)が両手で作りだしたモノの数々を、やはり両手で作った容器や運搬具も用いて、かなりの距離運ぶことができなければ、ヒトが地球上に広く拡散・移住して、それぞれの地域の自然条件に適応した生活を営むことは不可能だったであろう。

(2) 直立によって発声器官である声帯が下がり、口腔後部の構音器官が発達して、声を分節することが可能になった。分節された声による意思疎通は、DNAの上ではヒトと共通するところが極めて大きいとされているチンパンジー属の類人猿にもできない、ヒトに特有の能力である。特に音素と意味素の二重分節性をもった言語による新しいメッセージの創出と伝達は、以下の(3)の結果得られた発達した脳が可能にした概念思考ともおそらく関連して、感情や思考の相互伝達と洗練・蓄積に、極めて重要な役割を果たしたと思われる。

(3) 直立によって重い脳を支えることが可能になった。完全な直立歩行を常態としないヒト以外の霊長類は、後頭部を牽引する強い筋肉が付着する厚い後頭骨を必要とするために、直立するヒトに比べて脳容量が制約される(この点について、進化論が大きな影響力を持った19世紀後半のヨーロッパでの認識を示すために、最新の研究成果ではなく、遡って18~19世紀の図例を挙げる(図8,9)。直立は、脳の発達を可能にする条件は作ったが、実際にヒトの祖先の脳容量が増したのは遙かに後になってからであり、(2)の音声の二重分節化と概念思考の形成とは、相互に関連しているであろう。

近年、旧石器の作製・使用の研究領域と脳科学者との交流によって、以前から示唆されていた言語能力と運動神経系(利き手と細かい操作性)の石器文化史約250万年の間に起こった共進化の可能性について、興味深い検証が始まっているとされ(内田2010:16)、その成果が期待される。

これまで述べたように、ヒトの特質である二重分節言語と、ある程度以上複雑な道具の製作と、その結果作られたモノも含む(必要によっては、これもヒトが作ったモノである運搬具を用いての)長距離の運搬は、いずれもヒトの身体が生み出した。そのことを具体的に見るために、構音器官という形質と機能においてはほぼ均質なヒトの身体が、幼時からの慣用に伴う条件付けによって如何に多様な言語を生み出し得るか、他方、地球上に分散して形質と機能において多様化したヒトの身体が、運搬法と如何に関連しているかを、事例によって示そう。

言語については、各言語に特徴的な調音基底(*articulatory basis*)があり、幼時からの反復による構音器官各部の運動連鎖と協調の条件づけの結果、ある言語を第一言語とする話者は、その言語の調音基底を成す言語音を、意識せず楽に発音できる。アフリカ南部に話者が多いコイ=サン語に頻出する「吸打音」(*click sound*)は、これを第一言語として育った話者は意識的努力なしに発音できるが、そうでないヒトには、習得がかなりむずかしい。5種の母音を識別すれば足りる現代日本語を第一言語とする話者にとって、十数種の母音を含むヨーロッパ諸語を習得する困難は、現代日本人が経験していることだ。

次に、ある程度以上の距離を、かなりの高^{かさ}と重量をもったモノを運ぶ方法も、ヒトの身体能力が基盤になって作り出され、ある範囲の人々に共有される文化となって、地球上の多様な地域に多様な形で見出される。ここで筆者は、身体能力と文化を結ぶ媒介として、「人類働態学」(*human ergology*)の観点を重視すべきであると思う。つまり、地域により一様

でないヒトの身体形質・身体能力と、その地域で入手可能な運搬具の素材、及び運搬が行われる地形等の生態学的条件下で選択された道具とが結びついて、その効率が認められ選ばれるからこそ、それがあつた範囲の人々に共有される「運ぶ文化」になり得るのだ。

2-2. 生態学と働態学

筆者が重視する「生態学」的条件も、選択された道具と身体技法による効率を問題にする「働態学」の考え方も、もと 19 世紀半ばに、ダーウィンの影響を受けたドイツの生物学者で思想家のエルンスト・ヘッケル(1834~1919)によって提唱されたものだ(『有機体の一般形態学』 *Generelle Morphologie der Organismen*, 1866 等)。ヘッケルは、「生態学」(Ökologie)によって自然の一部として捉えられた人間の生理を研究する学問として、「働態学」(Ergologie)を位置づけた。ただ彼の基本的主張の一つであつた「個体発生は系統発生を要約して示す」(Die Ontogenese rekapituliert die Phylogenese)というテーゼは、鋭い洞察とある範囲での真理を含んではいるものの、一般的定立としてはかなり無理があり、その主張の思弁性に対する批判が先行して、ヘッケルの提唱は 1 世紀のあいだほとんど顧みられなかつた。

だが 20 世紀に入ってからヒトの急激な増加や、1950 年代以降の世界経済の著しい成長の結果、1970 年代になると地球生態系の危機が叫ばれ、生産性と経済効率に従属させられた「人間」の再生が重要課題となる。こうした状況で、生態学と働態学は新しい意味を帯び、学会活動も盛んになって来たといえる。

ヘッケルの「個体発生は系統発生を要約して示す」というテーゼは、先に述べた直立二足歩行と分節化された言葉の発話能力との関連については、示唆に富んでいると筆者には思われるので、手短かに触れておきたい。

ヒトは授乳期には、母親の乳房を口に含んで乳を飲み続けながら、同時に呼吸をすることが出来る。三木成夫がいみじくも指摘するように(三木 1992: 156-157)、母親が子を抱き上げ、乳房に口を押し当てさせて授乳する行為は、生物界でヒトにだけ見られる、進化のクライマックスを示す現象でもあるだろう。だが離乳し直立二足歩行を始めてからは、摂食と呼吸を同時に行えなくなることは、正月に餅を喉に詰まらせて死亡するヒトが跡を絶たない事実からも分かる。四足歩行の動物例えばイヌは、餌を食べながら、近寄るものに向かって唸り声を発することが可能だ。だが直立二足歩行のヒトでは、食道と気管とが併行して同時に機能しない。

空気と食物の取入れ口である鼻腔と口腔とは、イヌやウマなどの四肢性哺乳類では長く前方へ突き出ており、さらにこれに続く咽頭・喉頭・食道は、四肢性の体幹とほぼ水平で直線上の管腔だが、サル類では口腔と咽頭・喉頭とは少し鈍角に曲がった管腔となり、直立二足性に適応したヒトでは、鼻腔・口腔と咽頭・喉頭・食道とがほぼ直角の逆 L 字型の空気と食物との共通の通路、広く縦に長い咽頭領域を形成する。このようにして、構音器官としての共鳴腔、発声器官である喉頭からの音源を修飾する音道ができる⁵。

食物が喉を通過する時には軟口蓋が上がって鼻の奥を塞ぎ、食物を嚥下する時には喉頭

⁵ この部分の記述は、筆者が葉山杉夫から受贈した論文別冊(葉山 1993; 葉山 (編) 1991)や個人的教示に負っている。

蓋が下がって気管を塞ぐ。呼吸したり声を出したりするときは、軟口蓋が下がって鼻の奥に気道ができ、喉頭蓋は下がって気管から肺に吸気が、逆向きには呼気が通じる。これは直立二足歩行に伴う後口蓋部＝構音器官の発達、その結果としての声の多様化、そして分節化された音声を発する能力の獲得と併行した、進化の過程がもたらしたものと見ることができる。

立ち上がって二足歩行を始める前のヒトの乳呑み子が発しうる言葉は、呼気と唇だけを使った最も単純な両唇音、「マンマ」「ママ」「パパ」「ババ」などだ。乳呑み子にとって重要な乳に対する要求の表現は、日本語で食物を意味する幼児語で大人の俗語でもある「マンマ」、ラテン語で乳房を表す “*mamma*” やヨーロッパ諸語で母を意味する幼児語、哺乳動物を指す学名 “*Mammalia*” や、英語 “*mammals*”、仏語 “*mammifères*” 等に繋がっている。[*mamma*]、[*ma*]、[*papa*]、[*ba*]、[*baba*] 等の言語音が、印欧語だけでなく、中国語やアフリカのモシ語、スワヒリ語をはじめ、世界の多くの言語で母親や父親を指すことも、これと無関係ではあるまい。

だが乳幼児が独り立ちして二足歩行を始めるようになると間もなく、それまでの単純な両唇音だけでなく、構音器官を使った多様な言語音を発するようになる。この過程は、ヘッケルの「個体発生は系統発生を要約して示す」という考え方に、かなりよく対応する例と言えるのではないだろうか。因みに、猿回しのサルのように、生後のサルに人間が直立を仕込んだ動物には、この変化が当てはまらないことは、日本での詳細な研究からも明らかにされている(葉山 (編) 1993)。

日本で、働態学研究の重要性に早くから着目していた一人に、人類学者香原志勢がいる。1970年代に日本でも結成された人類働態学会の代表幹事も長く務め、とくに本稿で問題にする人力運搬について、香原は、働態学と研究技法において大幅に重なる生体運動学(キネシオロジー)の研究者との共同研究を科学研究費によって実施し、優れた成果報告書をまとめている(香原 (編) 1982)。

ただ、人類働態学や生体運動学の手法も取り入れた研究には、生体計測や実験の面での専門家と文化人類学者との共同作業が必要になる。筆者は大学では初め生物学的ヒト学を志して、東京大学前期課程は当時の生物系理科二類で学び、後期課程でも石田英一郎の総合人類学構想による、生体計測実習も含む自然人類学の実習や講義が必修だった、東京大学教養学科文化人類学分科の最初期の学生だったので、生体運動学の専門家達との協働も、当然のことのように、積極的に行うことができた⁶。さらに大学院では、北京原人の骨についてのフランツ・ワイデンライヒの微細な分析や、「遺伝的浮動」(*genetic drift*)に関する論文などを、自然人類学専攻の院生と一緒に購読する訓練も受けたが、文化人類学を専攻する学生にも、生物としてのヒトについての、単なる概論ではない、具体的事例による基礎

⁶ 当時東京大学文化人類学研究室助手だった筆者が呼びかけて1975年7月京都で2日間行った、京都大学人類学教室・東京大学理学部人類学教室・文化人類学研究室合同の助手・院生有志による合同勉強会(今西錦司、梅棹忠夫、伊谷純一郎ら京都大学教授も出席、残念ながらこの1回だけに終わった)の機会に親しくなった当時京都大学助手の故葉山杉夫からは、その後も筆者は多くの貴重な個人的教示を受けてきた。さらに香原志勢からも、筆者は個人的に多くの薫陶を受けた。とくに、筆者が関心をもっていた身体技法をめぐるのは、香原は筆者を招いて、生体運動学の専門家数名との密度の高い研究会を度々、自宅やお茶の水女子大学で催してくれた。

的学習が必要であると筆者は考える。

西アフリカの黒人の身体技法については、とくに深前屈の作業姿勢、作業や休息における、背を後ろにもたせかけない長時間の投げ足姿勢に、筆者は注目していたが(川田 1979, 1988, Kawada 1988, 1991)、日本の生体運動学の専門家男女3人(芦澤玖美、足立和隆、楠本彩乃)の協力を得て、生体計測と併せて深前屈などの身体能力のテストを行うことができた。生体運動学の専門家との共同調査の前提として、筆者はバンバラ人(マリ)の農作業と土器作りにおける身体技法の、働態学的見地からの詳細な調査と分析を行った(Kawada 1990; 後になっての日本語での刊行は、川田 1997a)。

この共同調査は、筆者が代表を務めていた科学研究費の海外調査として実施したもので、1991年2~3月と1992年11月に、西アフリカのサバンナ地帯およびニジェール川砂州(マリ)と森林地帯(ナイジェリア)という、生態学的条件も、生業形態(高稈性穀物⁷農耕、塊茎・アブラヤシ農耕、牧畜、漁獵⁸)も、住民の一見した身体特徴も異なる地域の5集団(バンバラ、バンバラ=フルベ混血集団、ヨルバ、フルベ、ボゾ)について行った。20~65歳の年齢の、5集団合計男性248名、女性276名の被験者について、上半身裸、下半身も最小の着衣での身体計測と共に、前屈、蹲踞など、筆者が身体技法の上で特に注目していた身体能力についてのテストをすることができた。

一部の男女被験者については、用意したショートパンツ一枚で生体計測の基準点にマーカーを貼付し、目盛板前でのさまざまな体位の写真撮影を行った。集会所など公の施設を借りて実施したこの調査は、地元住民と行政と外来調査者との十分な相互信頼関係によって可能になった。アフリカ人についてのこのようなデータは空前のものだが、おそらく絶後でもあるだろう。

この時は日本人との比較の手がかりとして、1990年7月にさいたま市の日本大学法学部前期課程学生について行った、18歳から21歳までの男子学生100名と、18歳から20歳までの女子学生100名(男女とも出身地は主に首都圏、少数はそれ以外の東日本と推定される)の計測結果(遠藤万里等 未刊)と、一部の計測値については、文部省体育局発行の昭和63年度体力・運動能力調査報告書所収の、20歳の社会人男性498名、同女性476名のデータを用いた。

⁷ 「高稈性穀物」とは、この科学研究費によるアフリカ調査班のメンバーでもあった農学者・地理学者の応地利明の教示により、筆者も用いるようになった用語だ。西アフリカ・サバンナ地帯の主作物であるトウジンビエ(*Pennisetum americanum* (LINN.) K. SCHUM.)、モロコシ(*Sorghum* sp.)、トウモロコシなど、茎が高い穀物を、フォニオ(*Digitaria exilis* (Kippist) STAPF)、イネ(*Oryza sativa* LINN.)などの低稈性穀物と区別するために用いる。高稈性穀物は、株間を広くとって栽培するため、播種、除草、収穫などの基本作業も低稈性穀物と異なるだけでなく、ヤッコササゲ(*Vigna unguiculata* (LINN.) WALP.)、バンバラマメ(*Voandzeia subterranea* (LINN.) DC.)などアフリカ原産のマメ類との混作が可能である点で、西アフリカ・サバンナ地帯の移動性の高い焼畑無施肥農耕を特徴づけている。日本語でアワ、ヒエ等、焼畑農耕で重要だった穀物を指す「雑穀」という呼称は、イネ、コムギなど、弥生文化以後の日本の主作物中心の蔑称であるため、農学上も意味のある高稈性穀物という名称を、西アフリカの主作物についても用いる。

⁸ ボゾ人は、ニジェール川で魚の漁のほか、ワニやカバの猟も行うので、彼らの生業形態を呼ぶのに「漁労」でなく「漁獵」という語を用いることを、ボゾの生活誌に詳しい竹沢尚一郎とも合意して用いている。

この結果、日本人と比べて、骨盤が前傾し、上肢と下肢特に上肢が長く、遠位の体節(前腕と下腿)の方が近位の体節(上腕と大腿)より長いこと、膝を伸ばした姿勢での深前屈が一般に容易(図 10, 11(右は日本人モデル、比較のため東京大学人類学教室で撮影))、蹲踞姿勢は可能だが不安定(両踵を床面に付けた蹲踞姿勢で、前方に伸ばした両腕を左右に水平に開いて行った時、体幹が不安定)などが明らかになった。

日本については後に、芦澤を代表者とする科学研究費によって、それ以前に筆者が多年調査を行って来た島根県の農村、三重県の漁村における、生体運動学研究者 5 名(西アフリカでの共同研究者芦澤と楠本のほか、佐藤陽彦、河原雅典、熊倉千代子)と筆者による、生業活動に伴う身体技法と体形の関連性についての、詳細な計測と調査を行っており、芦澤他は東京都千代田区でも、これに対応する計測を行った(芦澤 (編) 2004)。

西アフリカでの計測結果の詳細と、それぞれの地域住民の身体技法や農具をはじめとする道具についての調査結果は、調査地への成果還元と被調査者からの批判を可能にするために、仏文・英文の報告書として調査地と世界の主な関連研究機関に送り(Kawada *et al.* 1992)、日本でも日本人類学会、日本アフリカ学会での口頭発表や学会機関誌への寄稿(足立他 1993)のほか、一般向け学術書としても発表している(川田 (編) 1997a)。

西アフリカ住民と、日本人以外のモンゴロイドとを比較する目的で、神奈川大学 COE「人類文化研究のための非文字資料の体系化」プログラムの一環として、中国内蒙古自治区での調査も行った。フフホト(呼和浩特市)の日本語学校生徒男子 45 名(平均年齢 22.1 歳)、女子 46 名(平均年齢 22.5 歳)についての、騎馬習俗と体型(ソマトタイプ)の関係についての調査は、2004 年 4 月の予備調査(芦澤と筆者)と、9 月の生体計測(生体運動学の芦澤、楠本、熊倉が計測、筆者は被験者の乗馬経験、履物などについてのアンケート作成)を行い、『神奈川大学 COE 年報』第 3 号 に芦澤が報告書を執筆した(芦澤 2006)。

日本人以外のモンゴロイドについての身体技法と働態学的観点からの調査は、生体運動学の専門家による生体計測は伴っていないが、筆者が神奈川大学 COE プログラムによって、メキシコ(メキシコ研究の文化人類学者落合一泰と 2004 年 8 月)、中国内蒙古自治区(中国科学院の人類学者金鋒、および蒙古人の生態学者烏日娜と 2004 年 9 月)(川田 2005b)、モンゴル国(モンゴルの言語文化研究者上村明と 2005 年 7 月)などで行った。

2-3. 文化の三角測量——モノの運び方をめぐって

これらの現地調査や計測結果を踏まえ、身体とモノから出発し、生態学と働態学を媒介として文化を論じようとするとき、地域により一様でないヒトの身体形質・身体能力と、その地域で入手可能な素材および運搬が行われる地形などの生態学的条件とを、さらに視野を拡大して検討する必要がある。その一つの方法として、筆者はかねてから「文化の三角測量」(仏 *triangulation des cultures*、英 *triangulation of cultures*) を提唱してきた。筆者が研究の過程である程度詳しく知る機会を得た、日本、フランス、旧モシ王国(ブルキナファソ)を初めとする西アフリカ内陸諸社会という 3 地域の社会は、19 世紀末まで相互に直接の重要な接触がなく、それぞれの方向に文化を精練してきた。

「文化の三角測量」は、地測における三角測量からの類比的借用に基づいているが、地測の場合と同様、3 文化の 2 つを、他の 1 文化を測る参照点とすることによって、2 文化間の相互比較よりも、より適切な対象の測定が可能になると思われる。文化についての認識

は、認識する主体である研究者自身が生まれ育った文化による偏向が不可避である以上、完全に客観的ではあり得ない。研究者の文化も3文化の1つに含む、著しく異なる、相互に断絶した3文化の1つを、他の2文化を参照点とすることによって、より適切に対象化、相対化することを期待できるだろう。さらに、地測と同様、さまざまな文化の研究者の協同で三角測量点を増やしてゆくことによって、広汎な人類文化探求の可能性が開けるだろうと思われる。

ここで取り上げている運ぶ行為を、身体とモノについて、三角測量によって考えるとき、まずモノの重さを支えるのに直接関わる身体の部位、および必要な道具としてのモノ(括弧内に記す)を挙げれば、次のようになる。頭頂部(巻いた布、輪)、前頭部(帯)、肩(帯、棒、肩当て具)、肩から背の上部(重心の高い背負い具)、腰(重心の低い背負い具、腰で支え前にまわす籠)、前腕(把手つきの籠)など。

いま、「三角測量」の方法に従って、まず地域によって異なる身体形質を、ここで問題とすることの性格上、前記3文化よりもそれぞれの地域の範囲をやや拡大して、①西アフリカ内陸の黒人、②近世以後のフランスを中心とする地域の主な住民である白人、③日本人、アメリカ先住民も含む黄人(モンゴロイド)について、身体形質や育児法、それと密接に関連して、社会における慣用によって条件づけられた「身体技法」との関わりを検討したい。「運搬法」も、その一環として取り上げる。

身体形質の大まかな傾向を指示する便宜として、黒人、白人、黄人(いずれも有境集団の「人種」としてではなく、遺伝子型の連続的地域差に基づく表現型としての身体形質の地域差を、便宜的に指示し分ける名称として用いる)⁹の、上記①、②、③の群それぞれにおける、身体技法との関連での、以下のような特徴を指摘できる。

- ① 四肢、とくに前腕と下腿が体幹に比して長いこと、骨盤の前傾、それに伴って身体の骨格構造上も容易になる、深前屈、および背をもたせかけない投げ足座位の慣用(図12, 13, 14)、頭上運搬の著しい発達(図15, 16)(一部山岳傾斜地の多い地方、および東アフリカ海岸部では、前頭帯運搬も見られる)。男女とも歩容における上半身の直立と、ほぼ60度の外股歩き(図17)が顕著で、これは上下動を弱め、頭上運搬の安定度を高めることと相関していると思われる。
- ② 肩と上腕の相対的な発達、腕や上体を伸展させるスポーツや武術(ボクシング、フェンシング等)の発達、踵を地面につけた蹲踞の困難¹⁰、作業姿勢としての立位と高座位の慣用(図18)、肩から背の上部で支える、重心の高い背負い具による運搬、前腕を曲

⁹ 人種概念については、民族概念と共に、日本学術会議の諮問を受けて、日本人類学会・日本民族学会が1990年代の後半合同の検討小委員会を設け、会員へのアンケート調査も行って検討し、筆者もその委員の一人として検討に加わった。その結果は「民族」概念については、『民族学研究』63巻4号(1999年3月)に各委員が執筆し発表している。民族については、本稿3章の「基本概念の定義・再定義」でも取り上げるが、人種も民族も、有境の実体としては存在しないというのが、全委員の一致した意見だった。ただ、有境の実体としてなくとも、ヒトの身体特徴の連続的な地域差はあり、政治的原因による「人種問題」「民族問題」はあると筆者は考える(川田・福井(編)1988; 川田1995, 1999, 2010)。

¹⁰ 古い時代のフランス人の人骨の、膝関節の部分の摩耗度から、かつてはフランス人も蹲踞姿勢をかなり頻繁に取っていたのではないかとする見方もあるという(フランス史研究者故二宮宏之の個人的教示)。

げて掲げるアーチ形の把手が付いた籠運搬、腰で支え前に回す籠運搬の発達(図 19)。

- ③ 身体構造上、体幹に比して四肢の相対的な短さ、腕よりは腰を重視し、腕を曲げて引きつけるスポーツや武術(相撲、柔術、剣術)の発達、蹲踞と特に女性の正座の慣用(図 20, 21)、とくに日本における肩で重心を支える棒運搬と、重心の低い背負い運搬(日本西南部の仙骨支え背負い具等)の発達、アイヌ、南西諸島民、アジア山岳地帯の住民の一部、アメリカ先住民などにおける、前頭帯運搬(図 22, 23, 24, 25)、もしくは頤の前で荷を支える運搬(図 26)の発達。

さらに、文化的要因や育児法等との関連で、運搬における身体技法の、以下のような特徴を指摘できる。

- ① 男性が土器(女性原理を象徴)を頭上運搬することの忌避(片方の肩に乗せ両手で支えて運ぶ)、女性の前傾した骨盤の上に嬰兒を、両脚を開いた深前屈姿勢で、女性の胴に布でくくりつけて運ぶ嬰兒運搬法(図 27, 28)。
- ② 嬰兒の両脚を伸ばして布で固く巻く習俗(仏語 *emmaillotement*、英語 *swaddling*)、嬰兒が両脚を伸ばしたままの姿勢での、揺籃の発達(図 29)。嬰兒の四つ這い歩きの忌避から、傘立てのような木製又は藁製の「赤子筒」(仏 *étui à enfant*)(図 30, 31)、または回転アームによる「赤子吊り」(仏 *tourniquet*)(図 32)を用いた育児法。
- ③ 背負い手の背の高い位置で、嬰兒が背負い手の両肩に手を掛けるなどし、両脚は開いたまま背負い手の背にくくりつけられる姿勢での嬰兒の運搬。日本中部地方から東北地方にかけての囲炉裏使用地帯で常用されていた、エジコ(嬰兒籠)、イズメ、エヅメ(飯詰め)など、屋内で赤子が囲炉裏に転落するのを防ぎ、親が野良仕事に行くとき親の近くに置いておく容器(図 33)では、嬰兒は腰を深く曲げ、両脚を「がに股」状に開いた姿勢で、長時間固定して置かれる。これは、成人してからの男性のあぐら座りや、作業姿勢や武術、運搬姿勢における腰の重要性、重心の低さとも関連するかも知れない。また、住居の構造からも、日本では嬰兒が直立二足歩行以前に、活発に這って移動することが、ロコモーション発達的一段階として認められて来たが、これは ① や ② では、慣用としてはない。災厄から「這い出す」という縁起から、這い這い人形も生まれた。日本人以外の黄人の嬰兒の運搬法、育児法については、筆者の調査は断片的(四川省の漢民族、内・外モンゴル、メキシコとブラジルの一部)だが、日本式の背中で負ぶいはメキシコで 1 例(図 34)見かけたが、四川省の漢民族で背負い手と背中合せの木製腰掛け、他では布を用いるか布なしに嬰兒を横抱きにする運搬法が、メキシコも含めて多い。ペルーでは、*swaddling* が行われていたというが、筆者は確認していない。

運搬具を、社会がもつ価値観、人体と道具の関係についての一般的指向性から見ると、

①では、運搬具といえるようなものをほとんど必要としないくらい、頭上運搬が発達、普及している。側面でゆるやかな“S”字形を描く、骨盤の前傾した体幹で、荷の重心を垂直に支える頭上運搬は、極めて合理的かつ容易だ(図 35)。サバンナでは腐葉土の表層が、紅土層の上を浅く覆っているに過ぎないため、浅い耕耘や除草が必要だが、これに適した柄の短い鍬を、楽に前屈する長い上半身と長い腕(特に相対的に長い前腕)で、効率よく手前に引いて使うこと(図 12)も、「人体の道具化」の他の一例と言える。

②では逆に、運搬具の多様化が著しく、とくに③における運搬具と対比すると、例えば、

水を運ぶための肩当て(フランス語で *joug d'épaules*、英語で *yoke*、いずれも牽引獣の「軛」に由来した名称)(図 36)や、それにしばしば付随する、体の両側の水桶を固定する輪のように、機能の特化した物的装置を用いて、運搬を確実に容易にする指向性(筆者の「技術文化論」(後述、本稿 4 章参照)におけるモデル B の「個人の巧みさに依存せず、誰がやっても同じ良い結果が出るように道具を工夫する」という、西洋文化の指向性)の表れた例と言える。それは、人体と道具のかかわりにおける、「道具の脱人間化」としてとらえることができる。

③における、トネリコなど敢えてしなやかな木を好んで用いる両天秤運搬に見られる、人体への着脱が自在・容易で物的装置として単純な道具を、使う人間の「巧みさ」で上手に使いこなす(図 37, 38)という、箸の使用とも共通する、②の指向性とは対照をなす道具観の表れと見ることができよう。上記②との対比でいえば、「道具の人間化」と性格づけられるだろう。同時に、これら二種の運搬具を用いるとき力を使う人体の部位が、②では肩と腕であるのに対し、③のうち特に日本では腰が重要な棒を用いた運搬が、2 人で担ぐ駕籠なども含めて発達したこと、やはり運搬に関わる船の推進における櫓(腕力よりは、腕使いの巧みさと腰の重要性(図 39))も、②において全体に重心の高い身体使用が多く(図 40、41、42)、船の推進においても腕力が重要なオール漕ぎとの対比で興味深い。

3. 感性の層序¹¹

3-1. 基本概念の定義・再定義

感性の層序について考察するに当たって、本稿で用いる「文化」「民俗」「個人」「個我」「社会」「地域」「共属感覚」「共属意識」「民族」など、従来必ずしも本稿における意味では用いられて来なかった、いくつかの基本概念を、定義あるいは再定義しておきたい。

自然史の一過程としてヒトとその文化を捉える本稿の立場から、20 世紀後半の初め頃まで有力だった、「文化は文化より」という一種の文化至上主義を排し、「他者からの影響を通じて獲得されるもの、いわゆる学習も含み、だが本能に基づく要素も含む、ヒトの営みの総体」を「文化」とみなす最広義ともいえる定義を、ヒトに共通の、だが他の霊長類も含み、生物全体とも連続する、文化の定義とするところから出発したい。そしてより狭義の「文化」、ある地域の人々に程度の差はあれ共有されている、地域によって多様でありうる「文化」を、筆者は「民俗」という用語で再定義したい。

文化をめぐる諸概念を定義、ないし従来とは違った意味で再定義するにあたって、文化に条件付けられた身体の使い方である身体技法——挨拶の仕方、喜怒哀楽の表現、歩き方、座り方、食事の作法、求愛の作法、性交・入浴・睡眠・排便の仕来り等、生きる営み全般に亘ってほとんど意識されずに日々繰り返されている身体の使い方——が、一方では道具、衣服、履物、住居などの物質文化と、他方では、体内感覚、皮膚感覚、嗅覚、味覚、指先の触覚、聴覚、視覚などの諸感覚と結び合わされて、*habitus* つまり個人を超えてある範囲の人々に共有されている「おこない」を成り立たせている。逆に言えば、「個人」の集合で

¹¹ 以下の章は、筆者が「感性の人類学のための予備的覚え書き」と題して、神奈川大学 21 世紀 COE プログラム年報『人類文化研究のための非文字資料の体系化』第 3 号に発表したもの(川田 2006)を基に、構想も内容も大幅に改変し、加筆して新しい論攷としたものである。

ある有境の実体としての個々の「社会」内で、多少とも共通に営まれている非有境の、しかし社会によって異なる部分も多い「民俗」は、*habitus* を媒介としてある社会に生きる個人を条件づけ、ある身体技法を生んでもいる。つまり、「民俗」と「個人」は、身体技法の集合である *habitus* 「おこない」を媒介として、だが一方が常に他方を規定しているのではなく、相互の働きかけのうちに関わりあっている。身体技法をヒトの文化研究の重要な一領域とみる筆者の立場は、体内感覚も含めて、感性の諸領域に認められる特徴を指標として、ヒトの文化を生物一般と連続する相で把握し、研究対象とすることを志向している。

運搬具の使用と、概念思考の視覚・聴覚を通じての表象という二つの領域は、これまで筆者の現地調査に基づく研究においても、大きな部分を占めてきた。この 2 領域は、物質文化とくに運搬具と、アフリカの太鼓言葉も含む最広義の「エクリチュール」、ないしは身体から外在化された造形表象および器音表象に関わっており、いずれもヒトの身体技法、つまり文化によって条件付けられた身体の使い方を通して実現されるものである。モノと身体との関わりを重視する点では、身体技法についての筆者の考え方は、本稿の緒言で触れたボアズの“*motor habit*”（運動習慣）に近いが、より非限定的にヒトの「おこない」全般に関わるという意味で、「身体技法」という概念を、既に述べたように再定義して用いる。

モノと身体技法は、研究主体としてのヒトがもつ文化、つまり研究者の主観による解釈の偏りが、記号表象や心意現象などに比べてはるかに少ない領域として、広汎な比較研究に適していると言える。その一方で、ヒト以外の霊長類とも共通し、種及び個体としてのヒトの存続に不可欠で、本能や体内感覚と強く結び合わされて、「本能」と「文化」の接点に位置する、つまり種間的 (*inter-specific*) な営みである、性交、分娩、排便における身体技法は、基本的に一切モノを必要とせず素裸でも可能でありながら、文化による多様性が著しいというのは興味深いことだ¹²。

¹² 原則として道具なしで可能な性交の身体技法が、社会によって如何に多様であるかは、アルテール&シェルシェーヴ(2006(2003))を通覧しただけでも分かる。「おこない」として多様であるだけでなく、地域によって異なる身体特徴や、関連する「民俗」、地理的環境などによっても、規制されうる。筆者が現地調査で知り得た事例でも、ブラジルの採集狩猟民ナンビクワラ人の体位は、集落外で女性が立って樹などに掴まった状態での後背位が多い。家族が焚き火の周りに集まり、砂蚤を防ぐために灰を身体にまぶして屋外で眠ることが多い生活では、集落内での就寝時の性交は不可能だ。筆者が長く生活を共にした西アフリカ内陸のモシ社会では、夫の小屋に妻を呼んで行われる、男性が右脇を下に横たわり、女性は左脇を下に両脚を曲げて男性の下半身を挟み込む対面側位が、標準体位とされている。モシ人だけでなく、筆者が知り得た限りで、サハラ以南アフリカの黒人(既に述べたように、有境の「人種」としての意味でなく、連続的な変差を示す遺伝子型に基づく表現型としての黒人)社会でかなり広く、これが標準体位とされているようだ。男女とも骨盤が前傾しているため、平らな床の上でのいわゆる対面〈正常〉位では十分な結合が難しい。男性は右脇下で横たわったまま左手で女性を愛撫するが、これは左手の劣位観と結びついている。埋葬の姿勢も性交の標準体位と同じく、モシ社会では男女別々の場所ではあるが、共に南枕で、男は右脇を下に東向きに、女は左脇を下に西向きに埋葬される。これは「ウェンデ」(天空から万物を支配する力)が東から西へ向かう方位観とも結びついている。言うまでもなく、標準体位は標準であるに過ぎず、実際にはフランスの四十手、日本の四十八手、インドの六十四手などと称される変異があり、アフリカでも刊行物では筆者は未見だが、同様であろう。ボノボは対面〈正常〉位で交わるとされているが、体位が「民俗」により多様であることが、文化をもつヒトの特徴でもあるのかも知れない。

履物、農具や漁具、食器、住居など、身体技法としての歩き方、農耕や漁労における身体の使い方、食べ方、座り方、眠り方など、文化の多様性がもたらす多様なモノ＝物質文化が介在する度合いが増せば、身体技法もそれに伴って文化による多様性を増す、つまり種内の (intra-specific) で通文化的 (cross-cultural) ないし文化間的 (inter-cultural) から、文化内的 (intra-cultural) な性格を、より強く帯びるようになる。

これらの関係を模式的に示した図 A で、右端の 0 に位置づけた「生物体としての反射的動作」とは、熱いモノに触れた手を引っ込めるとか、急激な重い外傷を受けた時に声を発するなど、意識された行為以前の反応だが、熱いモノに触れた指先を舐める、耳朶を掴むなどこれに続く反応や、外傷を受けた時の声の発し方やそれに伴う行為は、すでに「文化内的」に条件づけられていると見るべきであろう。

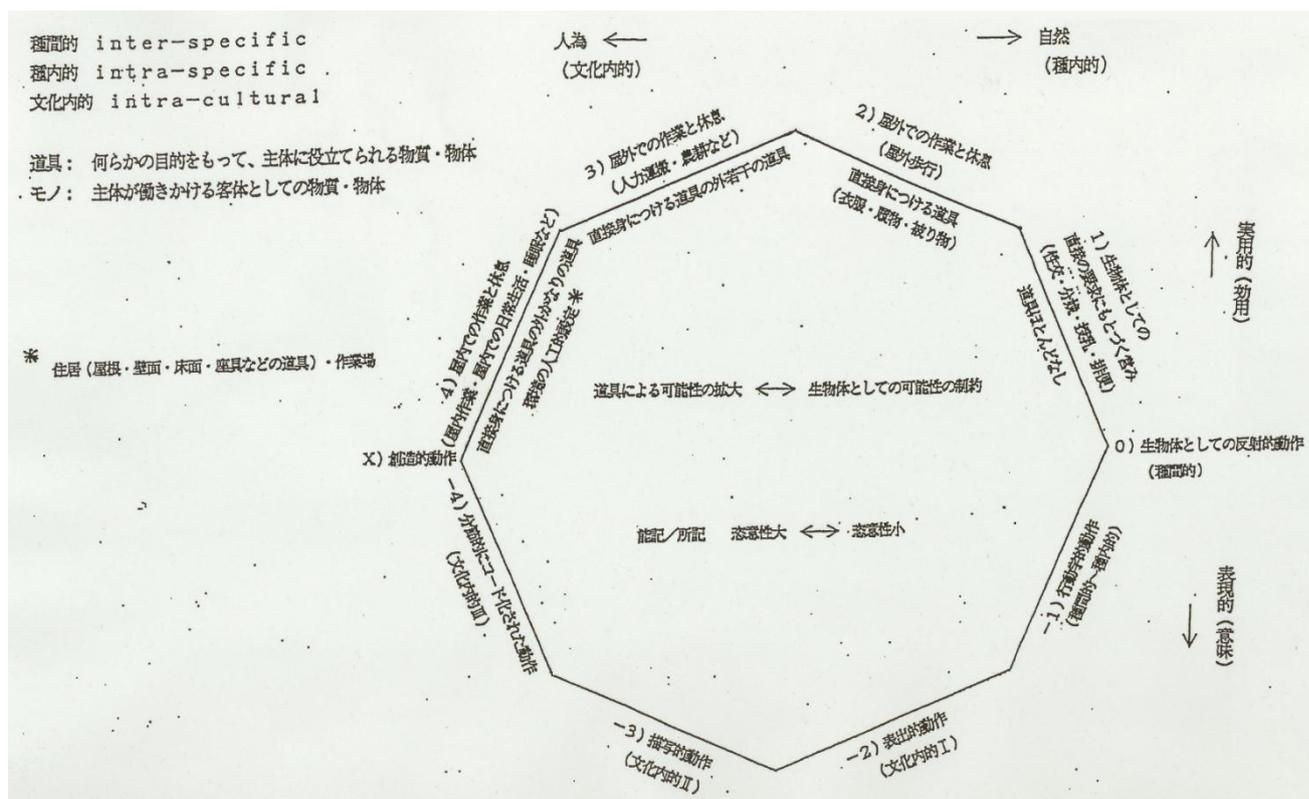


図 A 身体技法の効用と意味

その対極に筆者が位置づけた X の創造的動作は、創作舞踊のように、それを行う者が意識しないにせよ文化内的に条件づけられている可能性は大であっても、文化間的＝種内的に観る者の共感や感動を呼び起こす行為が想定されている。-4)に含まれるプロ・スポーツでも、選手の技の創造性や観衆の存在を考慮すれば、X との関係は、連続的に捉えられるべきであろう。

本能に基づく要素も含めて、ヒトが生きる上での物質的・非物質的営みの総体を、最広義の「文化」と呼ぶとすると、文化は最終的には「個人」によって、必ずしも一貫性なしに担われ生きられていると言うことができる。だが個人が担っている文化は、個人がその中で生を受け、生活する個人の集合である「社会」に営まれている「民俗」によって、意識されあるいは意識されずに、影響され拘束されてもいる。

生きる営みのうちヒトだけがもつ文化である言語の習得は、物心のつきはじめから、幼児が接触する他者のことばを聞いて真似ることの繰り返しによって、前述した調音基底と呼ばれる、ある言語の発音の基本的特徴をなしているものを、模倣のくり返しによって、構音器官諸部分の協調と運動連鎖の条件づけられた組み合わせ、心理学の用語で言う「手続き的記憶」(procedural memory)として身につけ、言語(仏 langue)としての基本コードを、体系として、意識しないにせよ習得することから始まる。個人によって多様でありうる言語活動(仏 langage)も、発信者と受信者がコードを共有していなければ、音声象徴性などを媒介とするより直接的伝達は別として、分節化された音声コミュニケーションの媒体としての機能を十分に果たすことができない。

だが成長につれて、個人の接触範囲は広がり、初次的言語の習得時に親密に接触してきた第一次集団以外から学習し、個人が創意によって生みだした表現も加わって、ある個人の言語世界は第一次集団のそれを超えることになる。味覚その他の感性や、価値意識においても、幼時に受動的に反復して慣れ親しんだものから独立して、広汎な選択と個人の創意に基づいて、新しい要素が付け加えられてゆく。

このようにして、成人期以後の個人は、個性と自己主張をもった「個我」を形成し、能動的に「社会」に働きかけて「民俗」を変えて行くこともできるようになるが、それでも言語を始め、衣食住などのさまざまな生活領域、とくに嗅覚、触覚、作法としての身体技法が複合された「反射的忌避」、例えば異なる「社会」に入って、ある個人が慣れ親しんできたものとは異なる「民俗」における、入浴、睡眠、排便の仕方や日用の器具などを強要されて咄嗟に感じる、耐え難い「気持ち悪さ」の感覚は、幼時からの「民俗」の条件づけによって、多分に意識下で個人を規制していると見ることができる。

いわば「民俗」は、「個人」という実体の集合である「社会」という、組織をもつ有境の実体の中に、ある広がりと持続性をもって、だが最終的には「社会」を構成する「個人」によって、必ずしも一貫性なしに生きられている *habitus* の総体であり、各個人のうちで、「民俗」に対してむしろ自由と独自性を主張する「個我」と層序をなして、ある側面は意識されずに、動的に共存している。ヒトの文化が含む反復と新しい変化の両側面は、それを享受する個人にとっても、慣れ親しんだものを与える寛ぎ・安心感と、新奇なものから受ける刺激・緊張の双方を求める、ヒトの心性に内在する指向の両極性(それは個人の一生でも、幼少期、青年期、熟年期、老年期などの時期や、個人の性格によっても度合いを異にする)とも関わっている。

言語、衣食住、生業、信仰、娯楽、等々、「民俗」を構成する多様な、それぞれが行われている「社会」の中での範囲が、相互に必ずしも重なり合わない慣行の一群は、有境の実体である「社会」の組織された範囲とも重なり合わずに、だが「社会」一般のうちに(しばしば一定の組織をもつ「社会」の枠は越えて)、ある持続をもって、生きられていると言える。有境の実体ではない「民俗」はイエの民俗からムラやサト、クニの民俗と、それぞれの中で一枚岩としてではなく、入れ子状になって、個人や世代や年齢による差異を含んで重層的に、変化への契機を孕みながら動的に、生きられている。

ただ「社会」は、一般に組織をもち、構成者である「個人」に対しても、「文化」や「民俗」に対しても、世俗的な影響を及ぼしうるという意味で、個人、文化、民俗にとって大きな役割をもっている。「民俗」の重要な構成要素である言語も、オランダ語とドイツ語の

ように、話されている言葉としては方言差があるだけで連続した、非有境の「民俗」であっても、「社会」の組織である国家によって「国語」として制定され、学校教育、マスメディア等を通じて普及がなされれば、体系としての「国語」は、「社会」と同じ有境の実体となる。

「地域」についていえば、かつての「文化領域」のような、或る特徴を示す文化と結びついた固定的、脱歴史的なものとして「地域」を想定することは、事実即ち誤りであり、多様な文化、本稿での「民俗」が、交わり変化する動的な「場」として捉えるべきだ(川田 2004: 第3章)。「地域」は何よりもまず、そこに生きるヒトが、視覚、聴覚、皮膚感覚、嗅覚、味覚を通して共通に感受する、景観、大気の寒暖・乾湿・風雨、動植物相、衣食住のあり方と、それらの感性の表象に、基盤を与える。「地域」の地形、気候、動植物相と、そこで営まれる「民俗」との相互交渉の内に、風土、風景が形成され、持続すると同時に、変貌もしてゆく。

このような意味での同一「地域」に、長く、ときに数世代以上に亘って生きる住民の間には、明確な自覚なしに「共属感覚」が醸成され得る。通常は意識されることのない「共属感覚」は、他の「地域」の住民や上位指導者との関係での、紛争や被差別や圧政など、「地域」の住民にとっての何らかの危機的状況で、多くは「地域」の指導者の呼びかけによって、自覚された「共属意識」に転化される。その際、「地域」住民に共通のものとして想定された、自分たちが共通の先祖から同じ血を分けた子孫であるとか、系譜上同じ信仰、あるいは言語を共有しているとか、同じ風土に先祖以来慣れ親しんできたなど、個人が自由に選べない指標が、指導者によって選べられて、ある範囲の人々が「民族」としての自覚と団結、つまり「共属意識」を抱くように促される。「民族」の自覚が呼びかけられるときの^{まがまが}禍々しさは、その呼びかけが理性よりは、情動に訴えようとするからだ。

「地域」は「社会」と同じく有境でありうる実体だが、空間の広がりにおいて、元来非有境の「民俗」と必ずしも静態的に対応しないことは、これまでに述べたところからも明らかであろう。

このように定義された「民俗」は、どのような手続きによって認識され、研究対象となりうるであろうか。「民俗」は、それを担って生きている当事者個人の意識された表明においては「規範」の束として、非当事者でありうる研究者の立場からは、或る時間幅のうちに観察された行動から帰納される、「傾向性」として捉えられるだろう。

研究者が帰納した「傾向性」を、面接によるフィード・バックを通じて、当事者の「規範」と照合、検討することをくりかえし、古い時代については文献資料や、図像資料・遺物を始めとする非文字資料も参照して、問題関心によって異なる有意な時間幅において研究者の立場から抽出された民俗の「指向性の束」として捉えることが可能であろう。

その際、実体として有境の組織をもった社会における、多様で重層的でありうる「民俗」を問題にするか、ある「民俗」を社会の境界を越えて追求するかは、研究関心によって異なる。ただ、さきに本稿 2・3 でも言及した「文化の三角測量」におけるように、巨視的に捉えられた地域の文化を、集権的政治組織という有境の「社会」を単位として、日本、フランス、モシ王国においてそれが成立した 17 世紀初めから、生活文化が激変した 1960 年代までという 3 世紀半の有意な時間幅を設け、通時的な検討も踏まえた上で、研究者の視点から「指向性の束」として抽出されたものを対比し検討しようとする場合、「文化」をある

一群の「民俗」を取り込んだ上位概念として、だがヒトの文化一般に対しては下位概念として、「日本文化」「フランス文化」「モシ文化」等、その場に応じて区別できる形で捉えることができるだろう。

文化の比較には、筆者は、連続の中の比較と断絶における比較とがあり、共に必要であると考え。連続の中の比較では、日本文化と中国や韓半島の文化のように、歴史的な相互関係をもつ文化の、影響、伝播、受容、非受容、変形等が問題になる。他方、筆者が提唱してきた「文化の三角測量」のように、日本、フランス、モシというような、19世紀後半まで相互に直接の重要な接触がなく、それぞれ異なる指向性をもって来た文化の、いわば断絶における比較は、ヒトにとっての文化の意味——例えば、「はたらく」ことの意味、死の観念と死をめぐる慣行、あるいは主従関係を律している原理——を、三文化において著しく異なっている表現形態を取って比較することによって、根底において問う、連続の中の比較の「歴史的」に対して「論理的」とでもいうべき、隠れた意味の発見に資する、“heuristic”な価値をもっているといえることができる。

3-2. 感性の表象としての文化

感性の表象としての視点からヒトの文化を捉えようと試みるのは、一つのねらいとして、ヒトに顕著な自覚された「個我」と、他者との共生関係において獲得する *habitus* の総体としての「民俗」との関係、感性を指標とすることで、層序関係において、動的に捉えられないだろうか考えるからである。

そのための考察を進める前提として、感性の領域ごとに、それぞれの特徴、各感性が生む表象のありようを概観すれば、およそ以下のようにまとめることができるだろう(括弧内の／で区切られた二項の前者は、行為の刺激となる感覚、後者はそれが満たされたときの感覚を示す)。

(a) 体内感覚(=個体と種の存続に直結):食(空腹・飢餓感／満腹・充足感)、排泄(便意／爽快感)、性(性欲／恍惚感・満足感)、分娩(つわり、胎動感、陣痛)、全身運動(それがもたらす快感)。これら自体は表象としての文化を生まないが、とくに食と性に関わる体内感覚は、以下の (b) から (f) までの感覚と結びついて、食文化、香文化、音楽、美術、文学における、食、香、性をめぐる多様な表象の原動力となりうるものである。

(b) 指先を除く皮膚感覚:皮膚感覚自体は極めて個別的なものでありながら、大気の寒暖乾湿の感触など、刺激を他者と共有することが多く、集合性を帯びて「共属感覚」の基底ともなりうる。生活の場としての自然とヒトの相互交渉の上に成り立つ「風土」にとって、根源的な働きをする。共感覚 (synesthesia) の発信体になりうる感覚として、漠としていながら喚起力が強い点で嗅覚と共通するが、言語化が容易な点では嗅覚と異なる(皮膚感覚を比喩的に用いた言語表現も豊かで、「職人肌」「肌が合わない」「ひと肌脱ぐ」など)。個体間の肌の触れ合いがもたらす親密感、(a) の体内感覚としての性欲の誘発、昂揚とその充足にも、皮膚感覚は直接の関わりを持っている(言語化における、女性が男性に「肌を許す」という表現は、比喩的であると同時に、極めて即物的でもある)。また、慣れ親しんだものと異なる「民俗」における、入浴、睡眠、排便のやり方等に対する反射的な忌避感、「気持ち悪さ」も、多くは皮膚感覚と嗅覚を媒介としたものである。

- (c) 嗅覚:非分節的に感知され、多くの場合、同じ匂いが同じ場にいる複数の個体に同時に感知される一方で、液香、薫香をめぐる人為的洗練、香道に著しい言語化、人体や風景の記憶等との連合にもとづいて、極度に個別化もされ得る。皮膚感覚とも連続するフェロモンの刺激が、異性との結合欲を喚起するといった、きわめて生物的一般側面と、特定の個人と結びついた匂いが、性欲だけからでは説明できない特定個体の異性に執着する恋愛感情という、ボノボからヒトに至って強く表れる「文化」に規定された側面との両極性を、嗅覚はもっている。嗅覚のもたらす印象は、進化の上で古層とされている大脳辺縁系に、記憶とともに直結し、非分節的で漠としており、直接の分節的印象に基づく言語化が困難だが、それだけにヒトの理性をうろたえさせるほどの広く強い記憶喚起力をもっている(ブルースト効果)。しかし、ある匂いと、それによって喚起される内容との結びつきは、極めて個人的なものであって、両者の間に一般的な関連を求めることは不可能だと思われる。
- (d) 味覚:生物の個体維持に不可欠な摂食行為と結びついた感覚として、発生的にも皮膚感覚と連続する器官で感知される種間感覚だが、同時に美味探求にもとづく人為的洗練、それに伴う言語化とも結びつく、文化内的にコード化された側面も持っている。作る行為と食べる行為、共に同じ味覚を享受する行為など、他者とのコミュニケーションの基底をなしていることが多く、おふくろの味、同じ釜の飯、郷土料理などを通じて、ノスタルジーや共属感覚の形成に大きな役割を果たす。
- (e) 聴覚:指先の皮膚感覚(ピアノ演奏、素手の両手の指先で膜面を多様に打って発信するモシ王国の太鼓言葉など)とも関連し、言語とも結びつく。個別的でありながら、基本的に他者との関係性において意味を帯びる感覚領域である。とくに言語は、音象徴等による直接的伝達を別にすれば、他者とのコードの共有がなければ、コミュニケーションの媒体としての機能をもたない。聴覚は受信における能動的な側面と同時に、ある生活環境の中での、自然または人工の「聞こえてくる音」や「音風景」(soundscape)が意識下にしみこませる印象、音声言語の力による同意や服従にみられるように、受動的でもあり得る。同意、不同意をめぐる言語表現における、「きこえた」「そりゃ、きこえぬ」「ききわけがいい」、仏語の“Entendu!”(聞こえました=分かりました)、モシ語で親が子に「分かったね」という時の[wuuma-me](=聞こえたね)など。ふるさと感覚、懐かしさの感覚など、「共属感覚」だけでなく、音声言語による概念化された意味の伝達、大音量の音声言語による扇動の反復、プロパガンダを通して、政治性を帯びた民族意識の基盤となる「共属感覚の共属意識への転換」を生む、重要な媒体ともなりうる。
- (f) 視覚:図像、その一部としての文字のように、意味の分節化されたコミュニケーションの媒体となる。書く行為における指先の皮膚感覚や言語とも関連する文字コミュニケーション(点字、盲人間の接触手話、タイプライターやワープロのキーボードのブラインド・タッチ、ヘレン・ケラーの指先の皮膚感覚による言語の習得など)の、発信・受信における著しい能動性、個別性と結びつくと同時に、風景や漠とした光景の記憶など、知覚における受動性、集合性の面も視覚は併せ持っており、「共属感覚」の重要な一要素となりやすい。視覚は二次元表象、その極致としての文字の読み書きと結びつく。ヒトの両眼視による近距離対象の、数万字の漢字の認知に見られる高度の識別能力(音声言語における、聴覚の識別能力は遙かに低い)と、両手の完全な自由が可能にした文字コミュニケーションは、分節化概念化された二次元表象の発信・受信における個別性、時間・空間の遠隔伝達可能性、反復参照可

能性、発信・受信の一時停止の無制限な自由などの特質により、獲得された知識の詳細な伝達、洗練、蓄積に顕著な役割を果たす。二次元表象は、狭義の文字以外にも、一次元事象・表象の二次元化(文字盤をもつ時計、カレンダー、年表、楽譜など)、三次元表象の二次元化(地図、平面設計図など)、四次元表象の二次元化(Labanotation や日本舞踊の様々な記譜等)、絵文字、表句文字、漢字などに含まれる図像象徴性に見られるように、二次元の視覚表象化によって、記録、検討、操作を容易にする点で、文化の検討、洗練、伝達に、大きな役割を果たしてきた。

これら諸感覚のうち、視覚、聴覚、手の指先の触覚は、適応行動と創造行動を具現する大脳新皮質に結ばれており、分節的な認知能力があるので言語に対応しうる。嗅覚、味覚、記憶は、本能、情動を支配する大脳辺縁系に直結しており、部分的にしか新皮質に行かない。ヒトの全身を覆って個体の境界を形作っている皮膚の感覚には、大脳に結びつかないものも多い。そのために皮膚感覚、嗅覚、味覚は、分節的な視覚、聴覚、触覚に対して、漠としているが強い、情動的な連想・記憶喚起力をもっている。

上に述べたことを通観して、感性の諸領域に、全体として次のような方向性を認めることができるだろう。

(a) は極めて個別的なものだが、(b) から (f) へ移行するに従って、意識下の漠とした感覚、他者と共有される集合的感覚から、自覚された「個我」の能動的感覚、大脳辺縁系から大脳新皮質への結びつきの可能性が増す。換言すれば、(f) から (b) へ移行するに従って、文化の集合的、持続的側面つまり本稿で定義した「民俗」の、意識下での「個我」への拘束性が増すと言えるだろう。

共感覚の基になる感性間の連合に、(a) から (f) のあいだで序列、方向性があるか、どの感性が発信体になりやすいかを、一概に言うことはむずかしい。慣用される比喩的言語表現は、一つの手がかりにはなるが、それも分節化、言語化が容易な (e) 聴覚、(f) 視覚が基になりがちであるとも必ずしもいえない。日本語の慣用表現だけについても、「臭い演技」(c)→(f)、「渋い演技」「渋い色」「渋い顔」(d)→(f)、「寒色」「暖色」(b)→(f)、「渋い喉」「甘いメロディー」(d)→(e)、「鋭い音」「軟らかい音」(b)→(e)、「黄色い声」「真っ赤な嘘」(e)←(f)、「乙な味」(d)←(e)、「甘い香り」(c)←(d) などの例がある。

ただ (c) 嗅覚は、「臭い」という、「不快な匂い」の意味から犯罪容疑にまで及ぶ広いマイナス・イメージをもった言語表現を除けば、分節的言語化が極めてむずかしいために、共感覚の発信体としての言語表現にはなりにくいとは言えるだろう。嗅覚を的確に言語表現する必要がある調香の領域でも(括弧内はフランス語)、floral (notes florales)、woody (notes boisées)、oriental (notes orientales) など、そして woody も更に、dry woods (bois secs)、oakmoss (mousse de chêne) に分かれるなど、当該の嗅覚と結びつきやすい具体的な事物の名を借りて指示される。

3-3. 感性の表象の多様性

ヒトと他の生物とに連続して認められる感性の、だがその表象としての文化は、同一種の *Homo sapiens* が生みだした文化でありながら、多様な表現形態を示している。筆者がこれまで「文化の三角測量」の方法によって、日本、フランス、西アフリカ等で調査してきた事例から、ヒトの感覚表象の異なり方を比較考察する上で重要だと思われる事項のいく

つかを、ここでは項目だけ、以下に例示する。

(a) 体内感覚：体内感覚を表す語彙、その比喩的用法(体内感覚 [例えば空腹感] を表す語から体内感覚以外への、及びその逆の、比喩的用法)。

(b) 指先を除く皮膚感覚：浴法など全身の皮膚の清拭法。油脂などの皮膚への塗布。排便後の清拭法。触覚を表す語彙、その比喩的用法。

(c) 嗅覚：薫香／液香。聞香、香道。匂いを表す語彙、その比喩的用法。

(d) 味覚：香辛料の種類と味の表現。油脂の素材(胡麻油、オリーブ油、ラード、バター、カリテ [シェア・バター]、椰子油)と味の表現。主食加工における粒／粉、乾／湿。食物のぬめり(納豆、とろろ汁、オクラ汁、ヴォアーカーの蓴汁)に対する好悪。発酵食物の旨味＝臭み(くさや、チーズ、スンバラ)に対する好悪。味覚を表す語彙、その比喩的用法。

(e) 聴覚：音声表現における産み字、メリスマ唱法の有無。器音における打音／持続音、打／弾／擦／吹音の好悪。リズム、二、三、四・・・拍、付加リズム、ポリリズム、持ち入り二拍子、持ち入り八ツ拍子。単音／多音(ハーモニー、ポリフォニー、トーンクラスター)、聴覚印象を表す表音語(旧来の用語での擬声・擬音語)。

(f) 視覚：基本色名とその由来。顔料の種類と製法。単色および組み合わせられた複数色の象徴性。方位・季節と結びついた色。表意表句図像・表意文字／表音図像・表音文字。音声象徴性に対比しうる図像象徴性。手話。視覚印象を表す表容語(旧来の用語での擬容・擬態語の一部をなす)。

(g) 身体表象：舞踊における、描記的／律動的、体幹一元的 (one unit)／多中心的 (polycentric)¹³。大地志向(反閃、シャフリング)・上体前傾／天上志向・跳躍・直立。性交、排便、出産、埋葬の体位とそれにまつわる伝承。右と左のシンボリズム、右手と左手。身体表象の語彙、その比喩的用法。

(h) 総合された感覚：潔／不潔、浄／不浄の区別と、これに伴う反射的忌避感覚も、民俗によって培われた、きわめて根の深いものである。自然環境と民俗との、長い相互交渉の結果として形成される、街道筋や集落などの景観、諸感覚・

・生業・衣食住などを媒介として、民俗によって捉え返された自然である風土。ヒト(文化)の領域／野性(野獣、精霊)の領域(里・家／山・野、*domus*／*silva*、*yiri*／*weogo*等)の区別も、自然条件によって多様でありうるが、基本的に共通する分類形式の表現型の例として、比較研究の対象になりうるだろう。

感性の面から分類した以上のような表象は、有形表象／無形表象などの物理的形態によ

¹³ 民謡やダンスの通文化的研究を行ったアラン・ロマックス(Lomax 1968)は、ダンスにおいて体幹が一元的 one unit か多元的であるかに注目した。能の舞の多くや、日本の一般人が踊る盆踊りなどでは、手足の動きはあるが体幹はほぼ一元的であるのに対し、エジプトのベリー・ダンスなどにおいては、体幹は多元的な動きをする。映像資料の制約上極めて一般的にはあるが、アメリカ合衆国黒人と、アフリカ黒人のダンスに見られる体幹多元の特徴に注目したジョアン・ケアリーノホモク(Kealiinohomoku 1976)は、「多中心的」(polycentric)という用語で、肩、胸、腹、腰などをそれぞれ異なるやり方で激しく動かすダンスの分析を行った。北アフリカやサハラ以南アフリカで、多中心的ダンスと打楽器の激しいポリリズムとに接してきた筆者は、リズムにおけるポリリズムが、体幹の異なる部分に異なる動きを鼓吹しているという印象を抱いている。音文化におけるポリリズムとポリセントリックな身体表現との対応関係を、世界大の視野で検討することが、筆者にとっての今後の課題だ。

る分け方で検討することもできる。有形表象、物質文化については、ヒトの文化の研究にとって、それを形作る素材や技術が、自然条件と自然観・労働観、技術を運用する社会・政治組織との関係で問題になり(筆者が提唱してきた「技術文化」という概念による総合的把握)、同時にそれら有形表象(家、社寺、記念碑、集落、共同の井戸や洗濯場・粉挽き場、伝承された道具など)が、ヒトの集合的な記憶の拠り所として持つ意味が問われることになる。

無形表象については、日常生活の身体技法(歩き方、座り方、眠り方、笑い方、泣き方、食事作法、挨拶の仕方など)、技術・儀礼の行為伝承、歌・語りの口頭伝承が、強い持続性をもって継承されており、「民俗」の基底としての意味をもっている。

3-4. 嗅覚における三角測量

ヒトの感性の内、「知覚＝運動有機体」としての発生の過程においても古層に属する皮膚感覚、および進化の過程で皮膚の一部が変化して生成したという鼻の粘膜による嗅覚¹⁴は、筆者が特に関心を抱いている領域である。未だ不十分ではあるが、日本、フランス、西アフリカで、これまでに筆者が得た「三角測量」的知見を手短に述べたい。

1980年代後半、筆者はコーセー化粧品会社技師の好意で調香用サンプルとテスト紙を用い、日本と西アフリカで、匂いとそれによって喚起されるものとの関連についての調査を様々な年齢・性別・社会的位置の数十人に試みたことがある。一定の匂いから喚起されるものが、日本でも西アフリカでもあまりにばらばらで、極めて個人的な記憶や感性に繋がっていたため、調査結果をまとめることすら諦めた。匂いと文字など視覚記号、あるいは文学的想像力との共感覚のあり方を探る上での興味深い事例として、日本の香道に関心をもって来たが、研究成果は未発表。香水文化の世界一の中心とされる、南フランスのグラーヌ¹⁵も2度(2003年、2005年)訪れ、国際「香」博物館や様々な香水会社の工房などの見学の他、父子二代の高名な調香師ミッシェル・ルンドニツカから、その工房で数時間ずつ2度、実験も交えて貴重な教示を受けた。いま本稿をまとめる機会に、ヒトの文化における嗅覚の位置づけと、その研究の問題点について、一般的に概観することから始めたい。

ヒトの祖先は、哺乳類としては稀な樹上生活を行い、知覚の面でも樹上生活への適応進化を遂げた結果、諸感覚の内でも特に、近距離を対象とする視覚に多く依存するようになっ

¹⁴ ヒトが性交の達成直後匂いに過敏になり、くしゃみを連発する現象は広く知られているが、ワトソン(2000:150)によると、オルガスムスに伴う交感神経の反応により、静脈が急速に膨張して鼻の粘膜の温度が1.5度上昇するためとされる。ヒトの生物としての基本的営みにおける、性器の皮膚感覚と鼻の粘膜反応とのつながりを示すものとして興味深い。

¹⁵ 18世紀のパリにおける、都市の悪臭充満と香水産業の洗練が共存する時代状況を背景に、魚市場の腸溜わただめに産み落とされ捨てられた、異常に嗅覚が鋭く、だが自身には体臭がない男が辿る運命を寓話風に描いた小説『香水——ある人殺しの物語』(ジュースキント2003(1985)。トム・ティクヴァ監督、独仏西合作で2006年映画化、『パフューム——ある人殺しの物語』の題で2007年日本公開)でも、パリの調香師が、弟子入りしたこの異才少年を、乖離法、蒸溜法などの高度な香水作りの技術を学べる唯一の場所として修行に旅立たせるのは、南仏のグラーヌだ。18世紀のフランス社会について克明に調べて書かれたと思われるこの物語でも、パリで孤児として引き取られた先での皮なめしの仕事が、注文の皮をこの少年が届けに行った調香師への、弟子入りのきっかけとなっている。グラーヌの香水産業も、革手袋と香水の結びつきから興ったのだが、革手袋に液香をつけることが世界一の香水産業都市の形成につながるとは、日本の嗅覚文化からはおよそ想像できない。

た。地上に生活する哺乳動物の多くが、発達した嗅覚をもつのは対照的に、ヒトは他の霊長類の祖先から恐らく 700 万年前に分かれて地上に降り、直立二足歩行を行うようになってからも、嗅覚に依存する度合いが極めて低い。イヌの嗅覚は 10 のマイナス 18 乗 g/ml の酪酸を知覚できると言われるが、これはヒトの嗅覚の約 10 万倍の能力である(外池 1989: 159)。それでいて、ヒトは香を焚き香水を肌につけ、香辛料で飲食物に香りを添えるなど、屢々宗教とも関わる精神生活の領域や、審美的、享乐的側面で、嗅覚のある側面を洗練し、それに伴う多様な人工物を作り、社会によって異なる「匂いの文化」を発達させて来た。

ヒトの感性について考える上で、多くの点で対照的な性格を示す視覚との対比で、嗅覚の二つの面に注目したい。

その一は、ヒトのもつ諸感覚のうちでも、視覚が対象をきわめて分節的に、主知的かつ能動的に捉えるのと対照をなして、嗅覚による認知は、非分節的で、主情的かつ受動的なことである。さらに、感覚疲労が視覚では起こりにくいものに対して、嗅覚はきわめて疲労しやすく、数分間で感じ続けられなくなることが多い。前記ルンドニツカが、動く映像を投影しながら映像に合わせて様々な匂いを噴射させる実験をしてくれた時の説明では、噴射をやめれば、その匂いの感覚は数秒でなくなるので、次の匂いの噴射に移れるという。

感覚疲労が起こりやすい反面、感知したものの再認知力は、短時間後では視覚が強いが、長時間では嗅覚の方が鮮明であると言われる。全体に、視覚、聴覚に比べて、嗅覚の生理学的メカニズムについては、まだきわめて不十分にしか解明されていない(Roundnitska 1980; Bizzozero 1997; 今井 2007)。

その二は、ヒトの外部世界の認知において、嗅覚がそのような性質をもっているのとおそらくは関連して、認知が非分節的で、記憶の喚起と同じ辺縁系と結ばれているからこそ、嗅覚が喚起するイメージは、その主体の、それも意識の表層からは全く思いがけない連想を誘い、それが強烈に主体の意識下の情感に働きかけうるという点である。マルセル・ブルースト『失われた時を求めて』の、紅茶に浸したマドレーヌ菓子を口に含んだ瞬間に、広大な記憶の世界がよみがえる有名な発端部分から、「ブルースト効果」と呼ばれている嗅覚のこのような性質は、嗅覚(それと共に、嗅覚同様皮膚の一部が変化した器官によって認知される味覚)が、ヒトの意識の表層に必ずしも関わらない、気紛れで激しい性質のために、実証的な調査研究を困難にしている要因の一つでもあるだろう。それにも関わらず、あるいはそれだからこそ、世界には社会によって著しく異なる、多様な「匂いの文化」が存在し、それぞれ相当数の人々に共有されながら、歴史的な変遷を遂げてきた。

嗅覚のこのような一般的性質からみて、「匂いの文化」の研究にはまず具体的な資料による実証が比較的行きやすい、匂いの文化の外枠を成している、匂いを享受する方法(香水・香油など身体への塗布、焚香や嗅ぎタバコにおけるような嗅覚器官への直接的適用、香辛料や噛みタバコに見られる味覚と併せた適用など)、ある民俗全体の中での匂いの位置づけ、用いられる原料とその調達法などについて明らかにして行くことが第一段階として望ましいと思われる。次いで感性の他の領域との連合 (association) または共感覚 (synesthesia) のあり方を探ることによって、その文化における嗅覚の位置づけが、より明確になることを期待できるだろう。

このような前提に立って匂いの文化を比較検討して行く上で、筆者が従来文化の他の領域について行ってきた、日本、フランス、西アフリカという、直接の影響関係が 19 世紀末ま

でなく、相互に著しく異なる文化を参照点とする「文化の三角測量」の方法を適用することには、研究の第一歩としての意味があるだろう。

まず、日本とフランスの匂いの文化における違いの第一は、フランスでは著しく発達した、液香を身体、衣服、革の手袋などにつける行為が、日本では明治の西洋化以前にはなかったという点にある。指輪、腕輪、首飾り、耳飾りなど直接身体を飾る慣習も、髪飾りの極度の発達と反比例して、日本には存在しなかった。香を、焚くか袋に入れて、着物に香りを移すという繊細な慣行も、身体への直接の香りづけを避ける仕来りの裏返しとして理解できよう。これは、高温多湿の風土の中で、日本人が頻繁に身体を水や湯で洗うという生活習慣とも関わっているであろう。アラン・コルバン (Corbin 1986(1982)) やジョルジュ・ヴィガレロ (Vigarello 1987(1985)) の研究がフランスについて明らかにしたような社会史的背景や、日常生活の潔・不潔感の違いも、日仏の匂いの文化の差異を生み出す要因になっているであろう。筆者は身体技法の研究において、文化によって異なる、何を気持ち悪く感じるかという、反射的な忌避感覚が根本的な重要性をもつと考えているが、匂いの文化の特性も、何を快い匂いと感じるかについてと同時に、反射的忌避感覚という否定的側面から規定してゆくことにも、方法上の意味があるだろう。

また、日本では聞香に用いる香も含めて、原料の香木はすべてインド、東南アジアなど外^と国からの貴重な渡来品であり、著しく限られた上流階級のみが享受できた。フランスの香水も、一時代前までは、決して大衆的ではなかったであろう。だがグラス地方でも、香水は、革手袋など革製品の香りづけと結びついて発達し、ニオイスマレ、アーモンド、ラヴェンダー、レモン、バラをはじめ、地元^とに豊富にある香料植物を原料として——無論フランス帝国時代の海外植民地をはじめとする世界各地の動植物も原料に使って——、精練されて来たのであり、日本における香木とは原料の希少性においても、主にそれに由来する社会の中での拡がりにおいても、大きな隔りがある。

飲食物の香り・匂いの面でも、ブドウ酒を始めとする多種多様な果実酒、さまざまな漿果・香草の芳香をしみ込ませたりキュールに対応するアルコール飲料は、日本にはなかった。香辛料については、家畜の肉を大量に消費、貯蔵しなかった日本では、ヨーロッパで 15、16 世紀に東洋航路開発の重要な動機の一つとなったような、香辛料への渴望は存在しなかった。トウガラシが、16 世紀に日本経由で伝わった先の朝鮮半島で重用されたのに引き替え、日本では香辛料として副次的な位置しか占めなかったという事実も、家畜文化との関連を物語っている。その反面、ワサビ、シソ、カラシ(和芥子)、サンショウ、ショウガ、ミョウガ、ユズなど、古くから魚料理その他に添えて、爽やかで洒脱な日本風(ユズの場合は、柚子湯のような用法も含めて)の香りは重用されてきた。柚子湯や菖蒲湯を始め、自然の香りを伴う温泉めぐりを享楽する日本人は、温泉を医療のためにしか用いないフランス人とは異なる、沐浴によって天然の香りに浸る感性を発達させて来たのかも知れない。

3-5. 西アフリカ三国(ベナン、ブルキナファソ、マリ)

現在まで筆者が度々調査に訪れているベナンなど、西アフリカの森林地帯では、豊富に自生するイネ科オガルカヤ属(*Cymbopogon* SPRENG.) (英語名 lemongrass 等を含む)、シソ科メボウキ属(*Ocimum* L.) (英語名 basil)、ショウガ科ショウガ属 (*Zingiber* BOEHM.) の諸種の植物が、香料としての塗布用、皮膚の薬用、アブラヤシ(*Elaeis guineensis* JACQ.) の果

肉と種子から採る油で製造される石鹸の香りづけ、飲食物の香辛料に広く用いられている。個々の植物の記述、利用法については、煩瑣になるので省くが、重要な点は、内陸サバンナ地帯(筆者の現地調査の範囲では、ブルキナファソ、マリ)との対比である。

内陸サバンナ地帯では、ショウガ属が希少になり、油脂植物としては野生のアカテツ科のカリテ(シア・バターノキ)(*Butyrospermum paradoxum* (GAERTN. f.) HEPPER *subsp. parkii* (DON.) HEPPER)の種子から採る、常温でもクリーム状の稀な植物性油脂(英語名 shea butter)が、皮膚塗布用、料理用油脂として広く用いられる。また、北アフリカ、とくにモロッコのアラブ=アマジール(かつては「ベルベル」という蔑称で指示されていた北アフリカ先住民)文化とも連続して、主に樹脂を用いた焚香の習俗が見られる。焚香のほか身体への香水(輸入。起源地は多様)の塗布も、内陸サバンナ地帯では広く行われており、大衆性という点では、フランスの香水をしのぐとさえ思われる。

焚香用の樹脂をとる植物は、年間降雨量 600~1300mm のスーダン気候帯では、インドから西アジア、北アフリカにかけて自生するカンラン科ニューコウ属 (*Boswellia* ROXB.) (乳香を採取)で、年間降雨量 600mm 以下のサヘル気候帯では、インド以西の乾燥地帯に自生する、カンラン科のモツヤクジュ属 (*Commiphora* JACQ.) (没薬を採取)である。

これらの野生植物から採る樹脂は、西アフリカ内陸の広域共通語マンデ語で *wusulan* (香、焚香)と総称される、匂いの文化を発達させて来た。焚香用の、小穴をあけた蓋付きの土器壺 (*wusulan daga*) も、大小さまざまな形のもが製造され、広く用いられている。

個々の香の原料としては、先に挙げたような草本や木本の葉、実、根、木本については木質の部分、樹皮、樹脂(特に聖書にも出てくる乳香、没薬を採る上記ニューコウ属カンラン科の樹脂)、苔類や地衣類があり、用法としては、焚く、煎じる、そのままあるいは油脂に混ぜて塗るなど、用途としては、薬用、防虫用、香りづけなどに広く用いられている。特に女性が、下半身と衣服に焚きしめ(香炉の上に長衣の裾を拵げて煙を受ける¹⁶)、あるいは腋の下に塗るなどして、男性を魅惑する目的をもったものが多い。とくにマリ中部のニジェール川大湾曲部のように、古くからエジプト始め北アフリカとの交渉が密接だった地域で用いられている樹脂、苔・地衣類の香には、古代エジプト、西アジアのキリスト教、イスラーム教で宗教儀礼とも結び合わされていた香と共通するものもある。

3-6. 嗅覚と共感覚

嗅覚は、味覚と共に皮膚の変形した器官で感知される、「知覚=運動有機体」としてのヒトの発生過程からも、古層に属する感覚だ。プルースト効果に見られるように、漠としているが喚起力の強い感覚であり、共感覚の基礎になり易い。この点について、筆者は前述の調香師ミッシェル・ルンドニツカから貴重な教示を受けた。

ミッシェルは、20世紀後半の現代調香の祖と言われる「偉大な鼻」(フランス語では、調香師を俗に“nez”「鼻」と呼ぶ)エドモン・ルンドニツカを父に持ち、幼少から調香師になるべく育てられた。父はディオールに委嘱された初の男性用化粧水“Eau Sauvage”(1966)

¹⁶ 燻蒸器の上に下半身を露出した女性が跨がって、臍に良い香りの煙を入れる慣行は、古代エジプトから、18世紀のヨーロッパまで行われていた(ドレント 2005(2001): 385)。エジプトから、あるいは地中海ヨーロッパから北アフリカを経て、サハラ南縁の社会にまでこの慣行が広まった可能性は、十分考えられ得る。

を始め、現在も高い評価を得ている数々の名作を世に送った。ミッシェルは、父(1996年没)が遺したグラス市郊外の広大な邸宅と工房を受け継ぎ、デザイナーからの注文による調香のほか、演劇や映画と人工的な匂いを組み合わせることにも意欲を燃やしている。

工房の試写室で自身脇に腰掛け、映画の進行に合わせて順次異なる噴射器から香水を噴射して体験させてくれた。匂いの印象は、数秒で消える。画面の動きに合わせて、だが視覚の印象をなぞるのではなく、異なる角度から補って新しい総合感覚の表現を作る努力をしているという。筆者に見せてくれたのは世界の様々な風景を撮った短編だったが、注文による制作もあり、演劇との共同制作も試みている。

この実験に立ち合わせてもらいながら、調性音楽を否定したロシアの前衛作曲家アレクサンドル・スクリャービン(1872~1915)を筆者は連想した。スクリャービンは、後期の代表作である交響曲『プロメテウス——焰の詩』(1910)で、鍵盤を押すとそれに応じて様々な色の光が放射されるピアノを用いて聴覚と視覚との統合表現を目指し、『神秘劇』と題された最後の未完作品では、更に五感全てに訴える共感覚芸術を企図した。

ミッシェルは、3000種位の匂いを嗅ぎ分けられると自称する。これは生来の資質と幼時からの訓練にもよるだろうが、一般の調香師の養成においても、1年間の訓練で500種位の匂いは嗅ぎ分けられるようになるという。ミッシェルの意見では、視覚や聴覚については、初等教育から図工、音楽などの教育・訓練が行われるが、嗅覚については一般には何の教育もなされない。幼時からの教育が、嗅覚についても行われるべきであると彼は言う。

3000種もの匂いを、どのようにして“répertoire”「目録化する」のかという筆者の問いに、ミッシェルは即座に、「自分がかつてそこに身を置いたことのある風景の記憶」と連合させてしるしづけると答えた。確かに「風景の記憶」は、全身の皮膚感覚、匂いの印象、視覚と聴覚、見えるもの聞こえてくる音が総合された、しかも「自分がそこに身を置いたことのある」記憶として、強度に内面化されたものであるだろう。これは、何と明快で、だがその先に、共感覚をめぐる何と多くの課題を孕んだ答であることか。

3-7. ブドウ酒の鑑識における共感覚

ブドウ酒の鑑識 (dégustation) においても「香り」(フランス語でブドウ酒についてだけ“bouquet”「花束」という語で嗅覚が示される) は、他の感覚に混じって重要な位置を占め、嗅覚をめぐる共感覚のあり方に示唆を与える¹⁷。

諸感覚が動員されるブドウ酒の鑑識では、鑑識の順序から言えば、聴覚、視覚、嗅覚、触覚、味覚が関与する。まずグラスに注いだときの音で、ブドウ酒の「密度」(intensité)を「聴く」(écouter)。ガス含有の有無、注いだ時の音が「柔らかい」(sourd)か「鋭い」(aigu)かは、ブドウ酒の質を「聴く」上で重要である。

次に、グラスを目の高さを持って横から、ついで上から覗くようにして、「色調」(robe ブドウ酒の鑑識以外の場では、「ドレス、ガウン、法服、僧服、式服」等の意味で用いる語)を見る。色調を表現するのに通常用いられる語は、la robe(色調)が brillante(輝いている)、

¹⁷ ローヌ川流域丘陵地のブドウ酒作りの中心、シャトーヌフ＝デュ＝パブにあるブドウ酒博物館(2003年)、及びブドウ酒の名産地ブルゴーニュ地方の中心ディジョンにあるブルゴーニュ生活文化博物館(2005年)で得た資料と、それぞれ現地のブドウ酒生産者からの聞き取りによる知見を主にしている。

claire(明るい)、voilée(ヴェールを被っている)、douteuse(曖昧な、不確かな)、tranquille(穏やかな)、 pétillante(パチパチ撥ねる、キラキラ輝く、発泡性の)等である。

その後、グラスを傾けてその上に鼻を近づけ、グラスを回して「香り」(bouquet) を嗅ぐ。香りには、主にブドウの品種に由来する「第一次の香り」(bouquet primaire)、発酵の度合いによる「第二次の香り」(bouquet secondaire)、古さに由来する「第三次の香り」(bouquet tertiaire) がある。香りの印象は、若いブドウ酒なら、花や果実の比喻で、古いブドウ酒なら「堆肥」(humus) や「茸」(champignon) の比喻で、極めて古いブドウ酒は動物、中でも「麝香鹿」(musc)の比喻で言語化される。

口に含んだ時には、口腔内の、特に舌と口蓋の触覚によって、まず温度、次いで「粘稠性」(consistance) 等の触感が、「か細い」(mince)、「肉厚の」(charnu)、「充たされた」(plein)、「まるい」(rond) 等の比喻で言語化して表現される。口に含んだ時の「香り」(arôme) を表現する語は比較的少なく、マッコウクジラから採る松脂状の香料「竜涎香」(ambre)、^{りゅうぜんこう}「堇」(violette)、「木苺」(framboise)、或いは更に、「バルサム風」(balsamique)、「焦げた」(brûlé)、「草質の」(herbacé) 等がある。そして「味覚」(saveur) は、舌の味蕾それぞれの位置と、一部は上唇の内側によって感知され、「こく」(onctuosité)、「甘味」(sucré)、「酸味」(acidité)、「苦味」(amertume)、「塩味」(salé) 等に大別されるが、それ以上の細かな印象については、簡単に一覧できないほどの多様な言語表現がある。

ブドウ酒の鑑識における言語表現の豊かさはフランス語で著しいが、これは言語による明確な表現を好むフランス文化の傾向に加えて、フランス産ブドウ酒の国際的な商品化の歴史が古く、品質の規準化、言語化が早くから必要とされたことにも由来すると思われる。因みに、日本酒でも、いま挙げた諸感覚による鑑識は精緻になされているが、各醸造元内部でだけ通用する表現によっていることが多い。上記のブドウ酒の「香り」(bouquet)と「匂い」(arôme) に対応する鑑識法も、金沢の酒造家福光屋第13代当主福光松太郎によると、鼻で嗅ぐ「うわたち香(上立ち香)」と、口に含んだときの匂い「ひっこみ香(引込み香)」としてあり、日本酒では「ひっこみ香」に重きを置くが、これは果実の単発酵酒であるブドウ酒と、コメの並行複発酵酒である日本酒の違いにも由来しているのかも知れない。

ブドウの品種や栽培地の自然条件による違いのように、日本の米もイネの品種、田の立地条件や土の質によって異なり、収穫された年の天候にも左右されることは、ブドウ酒におけるブドウと同様であるという。ただ純米酒以外に、太平洋戦争以来コメ以外の澱粉からも作れる蒸溜酒であるエタノール(醸造用アルコール)の添加が広まったこと(清酒の味を長く安定させる目的で混成することもある)、かつては蔵元ごとに自前の酵母を作り使っていたのが、戦後、国家の管理する施設で作られる5~6種の酵母を用いることが義務づけられ、画一化されたことなどによる、味、香りの多様性の減少も、日本酒については指摘されている(筆者の金沢での聞き取りによる)。

4. 「グローバル」と「ローカル」

4-1. グローバル化の諸段階

ヒトの文化が現在直面している最大の問題の一つは、情報と経済のグローバル化の大波の中で、ヒトとその文化が、如何にしてそれぞれの個性、ローカルなアイデンティティを

保ち得るかということであろう。

ミトコンドリア DNA の変異に基づく研究によって、ヒト (*Homo sapiens*) のアフリカ起源モデルは定着し、ほぼ 15 万年前に遡るとされる(ストリンガー&アンドリュース 2008: 178-179)。そして初期のヒトの出アフリカの経路は、スエズ地峡から西アジアへ、少なくとも約 12 万年前に始まったと考えられる(ストリンガー&アンドリュース 2008: 194-195)。

最初期のアフリカから西アジアへの移動の段階では、ヒトの数もそれほど多くなかったであろうし、文化の多様性も著しくなかったに違いない。だが、そこから地球上の各地へわが「ホモ・ポルターンス」たちは、めいめいの荷物を持って分散し、21 世紀の現在見るような、地域ごとにこれほど多様な、つまりローカルな文化、これほど多様な言語を分化させて来たというのは、驚くべきことだ。

『創世記』という視野の範囲内でも、エデンの園でアダムとイヴが何語で話していたかについては、古くから多くの研究がある(オランダール 1995)。それは単なる『創世記』の詮索を超えて、アリア人对セム人という、西アジアから西洋世界にかけての現代史にまで及ぶ歴史認識に関わる問題を孕んでいる。そして同じ『創世記』第 11 章、ノアの洪水に続く「バベルの塔」が提示する、重い寓意に充ちた問題群。創造主ヤハウェは、「同じ言語をもった一つの民」の思い上がりを戒めるために、「彼らの言葉を混乱させ、彼らの言葉がたがいに通じないようにしよう」と彼らを全地の面に散らし、全地の言葉を乱したのだ(『創世記』からの引用は、岩波文庫版(関根正雄訳、1991: 31)による)。

ヒトの言葉が互に通じなくなったことによって(そして「国家」に分かれたことによって)、如何に深い悲劇が現代に生まれているかは、『バベル』という象徴的な語を題にもつ、メキシコのアレハンドロ・ゴンサレス・イニャリトゥ監督の、モロッコ、メキシコ、日本を往還する映画(アメリカ、2006 年)が、生々しく訴えている。だがその一方で、現代では、世界の言語的多様性を守ろうという運動が、文化的多様性や、動植物種の多様性を守ろうとする運動と共に、盛んだ(例えば、原(編) 2010)。

言語の多様性を問題にする時、筆者は、ソシユール的な意味での体系としての言語 (*langue*) の概念にこだわるべきでないこと、その言語を習得して得られる社会的実利の保証が大切であることの 2 点を、強調したい。西アフリカ内陸に古くから発達した長距離交易の結節点となる都市での、都市内、あるいは 1 人の話者にとっての多言語的状況は、実践の場における言語実践 (*langage*) の、豊かな多様性としてある。この種の典型的な交易都市ジェンネ(現マリ)での多言語的状況について調査した、筆者の畏友で早世したマリの言語学者アブドゥライ・バリーは、1 人の話者にとっての第一言語としての「母語」の重要性すら、決定的なものとは見做すことができないと言う(Barry 1990)。

話者が少数の言語について、その言語の習得が社会的実利につながる保証を与えることで成功した例として、北欧三国におけるサーミ語(いわゆるラップ人の言語)の公用語としての認定がある(庄司 1995)。アイヌ語は、アイヌが日本列島の「先住民」として公けに認められたにもかかわらず、その言語の社会的地位については何の保証もないために、生きた言語としては消滅の危機にある。

その一方、母語ないし第一言語以外の言葉を用いて表現することによる、言語表現における緊張感をもたらす効果、同時にそれを敢えてすることによる母語ないし第一言語の相対化・活性化のためにも、多言語使用は意味をもつと筆者は考える(川田 1997b)。

4-2. 二組の対立概念¹⁸

ヒトの文化を最大限の時間・空間で検討する中で、いわゆる歴史時代に入ってからからの文化の「グローバル化」と、それとの関係で問題になる「ローカル」な文化の位置・意義について述べたい。

この問題を考える上で筆者はまず 2 組の対立概念を設定し、それらを混同すべきではないと思う。対立概念の第一はグローバル(地球的)対ローカル(地域的)であり、第二のものはユニヴァーサル(普遍的)対パティキュラー(特殊的)だ。第一の対立は、政治・軍事・経済の領域、及び文化自体がもつものも含めた「力関係」に基づくのに対し、第二の対立は文化そのものが具えている「価値」の普遍性と、地域住民にとっての特殊性とに関わっている。

2 組の対立の意味を混同してはならないが、相互に無関係ではなく、動的に交わっている。大英帝国の形成とアメリカ合衆国の世界進出に伴って英語がグローバル化した、だからといって英語が言語としてユニヴァーサルな価値をもつとは言えない。だが話者の範囲の拡大も恐らく一因となって、近代英語がゲルマン語元来の屈折語尾を失って孤立語的性格を強めたため使用が容易になり、洗練された表現を求めないとすれば、単語を並べるだけである程度の意味は通じる便利さをもつようになった。それでいて孤立語の中国語のように、表記に膨大な種類の文字を必要とせず、26 種の文字で足りるという特質によって、ユニヴァーサルな性格を帯びたとは言えるだろう。同時に、世界の多様な地域で多様化した英語に基づく、ローカルでパティキュラーな「英語文化」が形成されもした。

第一の対立は、原則として力関係に基づいているが、第二の対立は、価値に関わるものだ。字義通りの「グローバル化」の企てそのものである、フランス革命政府によるメートル法制定と、人体を基本にした地方的な単位の問題が良い例だ。

普遍指向が強かった啓蒙思想に支えられたフランス革命のあと、革命政府議会は、それまでのように人体を尺度にした、地方ごとに異なる長さの測り方をやめ、世界中共通の単位にしようという決議をした。同様に普遍指向が強かった古代ギリシャが生んだ哲人プロタゴラスは「人間は万物の尺度である」という、ローカルな特殊指向こそが普遍的だという、見事な逆説的命題を吐いている。事実人体の部分を規準にしたローカルな尺度は、18 世紀末までは、まさしく「普遍的」に、誰も怪しむことなく、地方ごとに用いられていた。

フランスでかつて用いられていた、長さを測る単位のいくつかを拾ってみても、「アンパン」empan(片手の指をいっばいに広げたときの、親指の先から小指の先までの長さ)、「クーデ」coudée(肘から伸ばした中指の先まで、約 50cm)、「ピエ」pied(「足」の意。ヤード・

¹⁸ この節に記した内容は、下記の口頭発表に部分的に基づいている。

- 1) 国際シンポジウム *Dynamiques culturelles et globalisation*(2003 年 10 月 4~5 日、フランス・アヴィニオン大学)での報告“Revaloriser les identités culturelles régionales et susciter la coopération inter-régionale à l'échelle globale”。
- 2) 国連大学グローバル・セミナー第 7 回金沢セッション『グローバル化と文化の多様性』*Globalization and Cultural Diversity*(2007 年 11 月 22 日、金沢市文化ホール)での基調講演「グローバル化に直面した人類文化：無形文化遺産保護の意義」
- 3) 成城大学グローバル研究センター公開シンポジウム「共振する世界の対象化に向けてーグローバル研究の理論と実践ー」2010 年 5 月 15 日成城大学での基調講演『「グローバル」「地域」「文化遺産」再考』(2011 年 3 月刊行予定)

ポンド法の foot (feet) に対応、32.48cm)、「プース」pouce(足の親指。1 ピエの 12 分の 1、2.7cm)、「トワーズ」toise(もと「身の丈」の意。6 プース)、「ブラス」brasse(両腕を広げた長さ、日本の尋(ひろ)に対応。約 1.6m)等々がある。

「クーデ」に対応する日本の尺は、呉服尺(曲尺の 1 尺 2 寸)と鯨尺(曲尺の 1 尺 2 寸 5 分)、曲尺でも異なるが、元はやはり前腕の骨の長さ由来する尺度だ。布などの長さを測るのに、肘を曲げた形は測り易いのであろうか、他には度量衡の単位がない西アフリカのモン社会でも、細長い帯状に織って巻いた綿布を売るとき、曲げた肘から中指の先までの長さを単位にして素早く測る、その単位を、元来「肘」を意味する語を当てはめて「カンティーガ」[kanti:ga] (複数「カンティーセ」[kanti:se])と呼ぶ。木綿を糸に紡いで布に織ること自体、北アフリカから伝えられたものであり、この測り方も北アフリカ起源の可能性もある。日本語で腕の小指側の骨を尺骨と呼ぶことから、この測り方と前腕との結び付きの深さが窺われる。尺という漢字の由来は、手の親指と中指を開いた象形であるらしく、日本の咫(あた)に当たり、寸の 10 倍、寸は 1 本の指の幅であると言う。尺骨を指すラテン語の解剖用語 *ulna* も、古代ローマの長さの単位だった。

フランス革命政府が学者を集めて検討した結果 1790 年に行った決定は、北極点から赤道までの経線の距離の 1 千万分の 1、つまり地球の周の 4 千万分の 1 を、世界に共通の長さの単位とすることだった。だが実際にこの距離を測ることはできないので、フランス北岸のダンケルクから、地中海に面したスペイン領バルセロナまでを精密な三角測量で測り、両端の地点の緯度から、北極点=赤道間の距離を算出するという方法がとられた。この 2 地点間には広大な山岳地帯があり、革命直後で政情も不安定で測量は困難を極めた。それでも足掛け 9 年かけて 1798 年に測量を完了、この新しい長さの単位は「メートル」*mètre* と名づけられた。尺度を表すギリシャ語の「メトロン」からとった語だが、サンスクリットの「ミートラ」、インド・ヨーロッパ語の祖形 *mesure* にも対応する。そして翌年にはプラチナ製のメートル原器が作られた。地方ごとに、人間中心で作られていた尺度を、ヒトを離れた地球の寸法から割り出すことにしたのだから、これこそ語義通りの「グローバル化」の先駆けと言わなければならない。

莫大な人力と時間と資金を使ってやり遂げた作業だったが、フランス国内でもメートルの使用には抵抗が大きく、一向に実行されなかった。1837 年には、フランス政府は 1840 年以降、メートル法以外の単位の使用を禁止する法律を出した。それにもかかわらず、実際の普及には至らず、さらに 30 年経って、度量衡の単位の統一に悩んでいたフランス以外の国の科学者達がメートル法に関心をもち、1867 年のパリ万国博に集まった機会に国際的にメートル法への統一を決議、1875 年に国際メートル条約が締結された。日本も 1886 年(明治 19 年)に、この条約に加入している。1921 年(大正 10 年)には改正「度量衡法」が公布されて、日本で長さの単位はメートルを使用することが決められ、1966 年(昭和 41 年)「改正計量法」により、尺貫法による定規や升の製造販売が禁止された。

だがその後現在に至るまで、筆者が日本各地で訪ねた和船作りの船大工たちは、頑として曲尺を使い続けているが、確かにその直角に曲がった曲尺は、船大工の作業用に、極めて便利で合理的にできているのだ。和服の仕立てには鯨尺が向いているし、和室の寸法も、メートル法以前のもの、畳の大きさからして住む人の身の丈に合わせて考えられていることは言うまでもない。

ヨーロッパでもイギリスは、フィート(単数 foot 足に由来)を基礎にした伝統的なヤード・ポンド法(日本でも洋服の生地を測るのには、ヤードに対応するオランダ語がもともになった「ヤール」が用いられている)を大英帝国単位とすることを、1824年に度量衡法によって定め、英連邦諸国や植民地でもこれが使われ続けた。だが1995年にメートルを規準にした国際単位系への移行を決定、2000年からは使用が禁止されている。とはいえ英連邦諸国で、実生活ではヤード・ポンド法は依然として広く使われているだけでなく、反メートル法の積極的な運動もあると聞く。

アメリカ合衆国は、先に述べた1875年の国際メートル条約の原加盟国だが、ヤード・ポンド法は「慣習的単位」customary unitとして、禁止されていないどころか日常生活ではこちらの方が普通に用いられている。しかもアメリカの影響が強い航空・宇宙関係の国際用語では、メートル法を採用している他の国も、アメリカの「慣習的単位」に合わせざるを得ない状況だ。国際線の旅客機で高度や対地速度が、メートルと同時にフィートでも示され、外気の温度は、摂氏と同時に華氏でも表示されることは周知の通りだ。

現代におけるグローバル化の中心にある米英が、かつてのフランス主導のグローバル化に対して、ローカルな「慣習的単位」に固執している事実を見ても、グローバル対ローカルという関係が、文化外の要素も多分に含む「力関係」の上に成り立っていること、普遍指向と特殊な慣習的価値の尊重という対立も、状況次第で如何に変わるかがよく分る。

4-3. グローバル化の始まり

ヒトの初期の先祖は、地球上の多様な地域へ移動・拡散するに従って、それぞれの生態系との相互交渉の中で、徐々に多様な言語と文化を発達させた。これは人類文化の一様性と多様性という観点から見て、多様性が強かった第一の段階と言えるだろう。

この段階でも、集団の移動や接触に伴う文化の変化、つまり人と自然の関係によってではなく、人が人に与えた影響による文化の変化は、至るところで起こっていたはずだ。だが「グローバル化」と言えるほどの、つまり地球規模での、ある文化の拡張は、ヨーロッパ世界、それも15世紀末に、レコンキスタで漸くイスラームの支配を脱したイベリア半島のポルトガル、スペインの王室がスポンサーになり、ジェノヴァ、ヴェネツィアなどイタリア商業都市の腕利きの船乗りたち、コロンブスやカダモストが、派遣されるという形を多くとって、「カトリック＝地中海＝ヨーロッパ」の、海洋による世界への進出と、その文化の伝播という形で始まったと見るべきだろう。ヨーロッパ人によって「大発見時代」と呼ばれてきた時代だ(川田1967)。

多くの困難にもめげず、航海技術上の工夫を重ねて未知の海外への進出を企てたのは、西アジアから北アフリカにかけての、イスラーム圏の厚い壁の向こうに海路到達して、キリスト降誕に参じた東方の3博士の一人の末裔プレステ・ジョアンが治めていると伝えられたキリスト教の国を発見し、カトリックを布教し、イスラームの仲介なしに東方の金や香辛料を手に入れようという強い願望からだった。「普遍的」を意味するギリシャ語の「カトリコス」に由来する「カトリック」という信仰からして、八百万の神を祀るアニミズムの世界に比して、何と攻撃性に充ちていることか。

コロンブスの西インド諸島到達2年後に、スペインとポルトガルの間には結ばれたトルデシヤス条約によって、セネガル沖カーボベルデ諸島の西370レグア(1770km)の、海上の

子午線に沿った線(西経 46 度 37 分)の東側の新領土がポルトガルに、西側がスペインに属することが定められた。その結果、ブラジル、熱帯アフリカ全土、インド、日本などは、すべてポルトガルの勢力圏になった。

この時はカトリック＝地中海＝ヨーロッパ文化の、他の地域に対するほぼ一方的な伝播だったが、スペイン人による中米のアステカ王国、南米のインカ帝国の軍事征服を別にすれば、宗教的、商業的な活動が主眼だったと言える。直接ヨーロッパから行った人の数も、スペインの軍隊——それも当時の船の輸送能力からいって小規模だったが——以外、かなり限られたものだった。従ってヨーロッパ文化の影響も、影響を受けた先の文化の一部として取り込まれる形でのものが多かったと言える。

日本人はこの時代、種子島へのポルトガル船の漂着(1543 年)から秀吉のバテレン追放令(1587 年)まで僅か半世紀の間に、少数の、言葉も不自由で軍事力の背景もなく渡来したポルトガル人達から、鉄砲を始めとして何と多くものを吸収したことか。そして現在まで意識さえされずに、ポルトガル語に由来する名で呼ばれているモノたちの数々。植木に水をやるジョーロ、雨露の如し「如雨露」という美しい文字を宛てているが、ポルトガル語の *jorro* に由来する。パン *pão*、ボタン *botão*、合羽 *capa*、ビロード *veludo*、オルガン *orgão*、正月のカルタ *carta*、羅紗 *raxa*、最近ではシャボン玉以外には使われなくなった、石鹸を意味するシャボン *sabão*。

女性が和装の下着にする襦袢も、今では日本の「伝統的」服飾文化の一部として定着しているが、もとはポルトガル語のジバン *jibão* (現代ポルトガル語では *gibão* と綴る)に由来し、立ち襟でボタンの沢山ついた、加藤清正も愛用した男性用の胴着だった。ジュッパ(袖の広い上着)というアラビア語が語源で、それがポルトガルでジバン(袖なしの胴衣)になって日本に持ち込まれた。一方、アラビア語のジュッパはフランスにもたらされてジュポン *jupon*(女性がスカートの内側に穿くペチコート)になり、それが 19 世紀にフランス経由で日本に入って来て、後に「ズボン」に変形された。同じアラビア語起源の言葉が、16 世紀と 19 世紀に、ポルトガル経由とフランス経由で日本に入って来て、女性の和装の下着と男性の洋装のパンツという、全く異なる衣服を意味するようになった(川田 2008 (1994))。

バサラ武将の織田信長をはじめ、戦国時代を通じて珍重する侍が多かった「赤い陣羽織」も、ポルトガル人が持って来た緋色のビロードが、この鮮やかな色を作れなかった日本では「猩々の血で染めた布」と言われ、身を守る呪力があるとして珍重された。この緋色には、イラン原産で南ヨーロッパにも古くから伝播していた植物ケルメスカシ(*Quercus coccifera*, LIN.)に寄生するカイガラムシの一種ケルメス (*Coccus ilicis*, EABR.) が用いられていた可能性が大きい。アメリカ大陸原産とされているが北アフリカ西部やスペイン南部にも多く自生するウチワサボテン (*Opuntia ficus-indica*, (LIN.) MILL.) に寄生する他のカイガラムシ、コチニール (*Coccus cacti*, LIN.)の名がむしろ知られている。

アフリカ、次いでアジアへ進出した当時のポルトガル人航海者は、行く先々での首長への贈り物や交易の見返り品として、緋色の羅紗の布地や帽子をよく使って喜ばれている。興味深いのは、日本より早く 15 世紀末からポルトガルと密接な交渉があったベニン王国(現ナイジェリア中部)では、それ以前からカムウッド (*Baphia nitida*, AFZEL.)で赤く染めた布を尊ぶ風習があったが、初めてポルトガル人と接触した王オバ・エウアレは、贈られた緋色の羅紗の合羽が気に入り、緋色を王だけの禁色とした。時代が下って、王の重臣達にも

儀式の礼装として許されるようになった。王と重臣達が炎暑の中、厚い緋色羅紗の合羽と緋色の頭巾で全身を覆い、汗まみれになって儀式を執り行っている王の年次祭に参列して、筆者は「もう一つの南蛮時代」に迷い込んだ想いを味わった（川田 1992（1989））。

4-4. 第二のグローバル化、大西洋三角交易

16世紀末にスペインの無敵艦隊がイギリス海軍に壊滅させられたあと、17世紀からは海を通じて世界へ進出するヨーロッパ世界の主力は、「カトリック＝地中海＝ヨーロッパ」から、イギリス、オランダを中心とする「プロテスタント＝大西洋＝ヨーロッパ」に移る。そして特許会社東インド会社による対アジア交易への進出と同時に、フランスも加わった、18世紀を頂点とする大西洋三角交易、現地首長からガラス玉や火酒や真鍮の装身具と——後には火器・弾薬とも——引き換えに、アフリカ人捕虜を買い取り、何百万人も奴隷として運び、アメリカの市場で売って大陸を開発し、アメリカの産物、綿花、砂糖、バナナ、カカオ、タバコなどをヨーロッパに運んで加工した。奴隷貿易で栄えたフランスの港町ナントに、ビスケット産業が興ったのも偶然ではない。出先の砦を守る要員や船乗りの犠牲も大きかったが利益は更に大きかった、この通称「黒檀」貿易によって、特に北アメリカとヨーロッパは富を蓄え、産業革命への下地を作った。

18世紀は、啓蒙思想家が輩出し、アメリカ合衆国の独立やフランス革命があり、欧米人によって「光明の世紀」と呼ばれるが、視点を南に移してアフリカから見ると、18世紀だけで600万人以上のアフリカ人が奴隷としてアメリカ大陸に売られ、アフリカ社会が荒廃した、人類史上恥ずべき「暗黒の世紀」だった。

いわゆる啓蒙思想家のうち、黒人の売買と奴隷制度に反対したのはディドロだけで、作曲家でもあったルソーは、砂糖黍農場で働く黒人奴隷にも「善き野蛮人」への想いを投影したのか、黒人青年の恋の歌に鄙びた節を付けた。独自の文明論から、劣等な黒人がアメリカ開発に役立てられることを賛美したヴォルテールは、ナントの奴隷商館に投資していたと言われる（川田 1990）。

アメリカ大陸からは、トウモロコシ、ジャガイモ、サツマイモ、マニオク、トマト、カボチャ、ラッカセイ、タバコ、パイナップルをはじめ、多くの有用な栽培植物がユーラシアやアフリカにもたらされた。

4-5. 第三のグローバル化＝植民地化

第三のグローバル化は、18世紀にアメリカ合衆国の独立によってアメリカへ、ピョートル大帝が進めたヨーロッパ化によってロシアへ拡大された西洋世界による、19世紀後半の非西洋世界の植民地化によって特徴づけられる。それまでの、交易拠点を中心とする接触とは異なり、植民地化は、拡大された西洋世界が産業革命以後、非西洋世界の土地をその住民ごと支配して、西洋世界の産業に第一次産品を供給させ、同時にその産業製品の市場とすることに主眼があった。幕末・明治初期の日本や、同じ時期の非西洋世界が苦しめられた、中国次いで日本で「万国公法」と呼ばれた「西洋世界の掟」が、軍事力、産業力を背景に、世界に拡大され「西洋世界の掟」のグローバル化が始まった時代でもある。

1648年のウェストファリア条約は、当時の世界でヨーロッパにおいてだけ、少なくとも名目的には成立した「多国間関係」の掟であり、それが国際法という形で非西洋世界にも

押しつけられた。掟があってもそれが守られるのは、軍事力を始めとする現実の力関係によることは、ウェストファリア条約で独立を認められたオランダが、対仏同盟戦争で1792~1795年にはフランス革命軍に占領されてバタヴィア共和国となり、1813年までナポレオンの統治下に置かれたこと、1864年プロシヤ=オーストリアがデンマークに宣戦布告し、その結果シュレスヴィヒ、ホルスタインなどがプロシヤに併合されたことなど、例は枚挙にいとまがない。

つまりこの西洋の体制内部も、現実には軍事力の力関係で変動をくり返していたが、これは西洋キリスト教圏の複合的価値観の上に成立した体制であり、これに基づいて形成された「国際法」が、非西洋世界、たとえば東アジアへ進出するに当たっては、「万国公法」として、条約の基礎として普遍性をもつ原理であるかのように、だが実際は力関係に基づく不平等条約の形で、幕末の日本にも押しつけられた。

19世紀のグローバル化における、西洋世界の非西洋世界への影響は、植民地化された地域のポスト植民地時代も含めて、産業技術の領域、公的機関の制度や施設、それに関連した生活様式の領域に見ることができる。日本は19世紀半ばに「西洋世界の掟」に従って国を建て直すことで植民地化を免れ、「脱亜入欧」「富国強兵」政策によって積極的に西洋化を進め、かつては多くを学んだ朝鮮や中国を、西洋の進出に直面している同じ立場の仲間とは見ず、西洋の側に立って、侵略の対象にした。

西洋世界に植民地化されたアジア・アフリカ諸地域と日本との、西洋化のあり方の大きな違いは、西洋の一国に支配され、支配に赴いた行政官、兵士、商人等を通じて、西洋一国の文化をまるごと押しつけられた植民地に対して、日本は主体的、選択的、間接的に、西洋全体の一国ないしいくつかの国から、当面日本にとって必要なものを取り入れたことにある。日本から派遣された留学生や、特定の目的のために高額の謝礼を払って西洋から招いた教師や顧問など、エリートを通じての間接の西洋化だった。

4-6. 二つのグローバル化の対比

15世紀末に始まった第一回のグローバル化と、18世紀を頂点とするヨーロッパの第二次世界進出を挟んだ19世紀の第三次のグローバル化とを対比して、二点を指摘したい。

第一のグローバル化では、ヨーロッパ世界にとっても、初めて接した異郷の人々は好奇と驚きの対象だった。コロンブスの一行が新世界でめぐり逢った「人間に似た生物」を、「人間」とみなすべきか、神の福音を伝えるに値するかどうかさえ、論争的になった。1537年に、「インディオは真の人間である」というローマ教皇の回勅によって、この論争に決着がつけられた。

初めて出逢った異郷人は、理解が十分でなかっただけにかえて、ヨーロッパ人の視点で理想化されさえした。1580年に発表された、フランスの思想家モンテーニュの『エッセー』第1巻31章の「食人種について」で、モンテーニュは、新しく「発見」された「野蛮人」の習俗や倫理観に、理想を投影している。「野蛮人」と対比して、ヨーロッパの「文明人」を批判的に見るという点で、のちのルソーやその崇拜者ベルナルダン=ド=サンピエールらの「善き野蛮人」の思想や、20世紀になってからの文化人類学の視点の先駆をなすものと言える。モンテーニュは、アメリカに長く暮らした友人や、フランスの港町ルーアンに連れてこられた3人の「野蛮人」について言われていることを、彼らの一人からあまり忠実

でない通訳を通して聞いた話など、極めて限られた知識に基づいているので、それだけになお、彼の視点からの理想化が容易だったとも言える。

注目すべきは、この時代のヨーロッパ人にとって、これら異郷で「発見」された人々は「野蛮人」*savage people*、フランス語で *les sauvages* と呼ばれたことだ。*savage*、*sauvage* という形容詞は、ラテン語の「森」*silva* に由来し、ゲルマン系の言葉でも *wild* は、英語の *wood*、ドイツ語の *Wald* など「森」を意味する語から出ている。12世紀頃まで深い森に覆われていたヨーロッパを、ヒトが開拓して住むようになった領域が、ラテン語の *domi* 「内で」に由来する *domus* で、ラテン語の *foris* 「外で」に由来する、英語でも *forest* 「森」や *foreign* 「よそ」に対して、「うち」を意味する *domestic* などの用語に、こうしたヨーロッパ人の自然環境との関係の記憶が刻まれている。人間が居住空間 *domus* を作ったあとでも、「森」は狼や熊が跋扈し、伝説上の「野人」や妖精が棲む異界だった¹⁹。

つまり、第一のグローバル化の時代のヨーロッパ人にとって、非ヨーロッパ世界の人々は、異界に棲む、奇っ怪だが、もしかすると畏怖すべきかも知れない存在だった。ところが、19世紀の第三のグローバル化の時代になると、「西洋世界」の軍事力、産業力による「非西洋世界」の征服が進み、非西洋世界の人々は、もはや畏怖すべき得体の知れない存在ではなく、遅れ劣った人たちと見做されるようになった。

ダーウィンの進化論と同じ頃、イギリスの社会学者スペンサーが、社会進化論を発表した(『第一原理』(1862)など)。やや遅れて、アメリカの法律学者モルガンが、アメリカ北東部先住民の親族体系の研究に基づいた『古代社会』(1877)で、人類は皆同じ発展段階を経て「未開」から「文明」へ進化するという説を唱えた。モルガンの説を下敷きにして、エンゲルスが唯物史観の古典とされる『家族・私有財産・国家の起源』(1884)を著した。

要するに、第三のグローバル化以後の西洋世界の人々は、彼らの西洋社会が人類進化の最高の段階にあり、他の地域で西洋人に発見され、征服された人々は、遅れ、劣った段階にあると見做すようになった。15世紀末に始まる第一のグローバル化の段階では、「野蛮人」つまり「森(異界)の人」として、ヨーロッパ人とは空間的に隔たった異人とみなされていた非ヨーロッパ世界の人々は、19世紀後半の第三のグローバル化の段階では、時代的に遅れ、劣った人々として「未開人」*primitive people* と呼び変えられた。*primitive* という形容詞は、「初めの」「第一の」を意味するラテン語の *primus* に由来している(川田 1989)。

この二つの段階でのグローバル化の主体と客体の関係が、主体の側からの観点で、空間的な差異から、時間的な前後関係へ置き換えられたことの意味は重要だ。

¹⁹ かつてヨーロッパ人によって、*domus* (ヒトの居住域) の *foris* 「外で」に由来する、*forest* 「森」や *foreign* 「よそ」の者と見做されていた部類の人々に属する、アフリカのモシ人の空間認識では、広漠としたサバンナのただ中でのヒトの居住域は *yiri*、これに対して野獣や精霊が跋扈する荒野は *weogo* と呼ばれていた。遠い異国も *weogo* であり、古くから彼らに知られていたサハラ南縁のトンブクトゥのような都市も、19世紀末のフランスによる植民地化の後にはフランスやパリも、*weogo* で、そこに住む人たちは *weo-ramba* (荒野の住人) と呼ばれている。ヒトの領域と野生の領域の対比は、ヨーロッパ、アフリカと同様に、日本でも自然条件は異なっても、村・里／野・山などの形で存在する。ヒトが同類とよそ者を区別することは、文化により自然条件によって表現は多様だが、広く認められると思われる、本稿 5. (37頁以下) で検討する、食と性における同類と非同類の区別の付け方と共に、比較検討を進めるべき領域であると思う。

第一と第三のグローバル化を対比して、指摘したい点は、二つのグローバル化は、どちらも基本的に「ヨーロッパ世界」を主体として起こっているということだ。人類史的な視野で見れば、「ヨーロッパ世界」は、決して原初の段階から主導的な位置にあった文明ではない。メソポタミアに形成された農耕と牧畜が密接に結びついた生産形態と、東地中海文明の思想的、宗教的基盤の複合から、二次的に、時代としても地球上の他の文明に比べてむしろ後発的に、強力になって行ったと見ることができる。

だがいま検討してきたことから明らかなように、十字軍の時代を通じて経済的にも、技術的にも力を増したイタリアの商業都市を中心に、14世紀頃、東西のさまざまな要素の結合によって、東部地中海世界で飛躍的に発達した航海術と地理上の世界認識が、イベリア半島のポルトガル・スペインの政治・文化的興隆と連携して、15世紀末に始まる第一のグローバル化の主体となる条件を作り出したと見ることができる(川田 1967)。その後の大西洋三角交易、ウェストファリア体制等を通じて拡大・強化されたヨーロッパ世界は、第二、第三のグローバル化の主体にもなった。

しかし、そのようなヨーロッパ世界、およびその拡大された西洋世界が形成された原動力は何なのか、これまでも断片的に言及してきたその理由を、筆者の提唱する「技術文化」の概念と「文化の三角測量」の方法によって、以下に整理してみたい。

4-7. 「技術文化」の三角測量

ここでいう「技術文化」は、ハードウェアとしての狭義の技術を、それを支えている自然観、労働観の具体化された発現と見た上で、技術の運用における社会・政治的人間関係も含めて、多文化間の比較検討の対象とするための概念である(川田 1997c、1997d、1998; Kawada 2000)。多文化間の比較といっても、ここでは筆者の三角測量の方法を用い、日本、フランス、モシという、現実に存在する事例に基づいた検討の結果ではあるが、更に抽象度を高めて一般性を持たせるために固有名詞を取り去って、モデルA、モデルB、モデルCとして検討する。

まずこの3例を、それぞれの文化をもつ有境の政治社会として対象化するために、それらが集権的政治組織を形成した17世紀初め(A徳川幕藩体制、Bブルボン朝王政、Cモシ王政の成立)から、それぞれの社会の生活文化に根源的変動の起きた1960年代までの、ほぼ3世紀半を考察の対象とし、そこに研究者としての立場から、当面の課題にとって意味のある点についての「指向性」を抽出して、その特徴を対比するという方法を採用。細部にまで亘って議論すれば厳密さを欠くことは当然だが、「敢えて対比することによって、隠れていた有意な特徴を浮かび上がらせる」ことを目的とする。

例えば「技術文化」の指向性の特徴を、A=二重の意味での人間依存、B=二重の意味での人間非依存、C=人間と自然を支配する力への依存の中の働きかけとし、それぞれにおけるヒトと道具との関係を、A=道具の人間化、B=道具の脱人間化、C=人間の道具化、と捉えてみよう。

モデルAにおける「二重の意味での人間依存」とは、第一に、人間の巧みさによって単純で機能未分化な道具を多機能に使いこなすことであり、第二に、良い結果を得るために、人力を惜しみなく投入することである。第一の点は、箸や艦に良い例を見ることができよう。第二の点は、限られた水田(灌漑による稲作は、同じ土地で連作が可能な稀な農法だ)

で、労働生産性は無視して土地生産性を上げるための、惜しみない勤労を推奨する価値観に見ることができるだろう。

モデル B では第一に、人間の巧みに依存せず、誰がやっても同じように良い結果が得られるように道具を工夫する指向性、第二に、人力を省き、畜力、水力、風力などのエネルギーを利用して、より大きな結果を得ようとする指向性に、その特徴を見ることができる。このことからモデル B では、エネルギーの採取元から働く先までの、エネルギーの伝達装置を工夫することが重要になる。伝達装置が有効であれば、エネルギー源が水力から蒸気の方に、あるいは水力タービンから蒸気タービンへ、馬の牽引力から内燃機関の力へ変わっても、その転換は連続的移行として実現され得る。その意味で、「伝統的」装置から「近代的」装置への移行は連続的であることが多い。人力はいずれの場合も、エネルギー伝達系への介入であって、人力が車を牽く等の主要なエネルギーになるのではない。

C では、気象を始めとする圧倒的な自然の猛威の中で、自然と人間を共に支配する至高の力「ウエンデ」への、依存の中の働きかけ「ベレム」(生贄などの儀礼を通じての祈願)が重んじられる。社会生活においてモシの人々を、最高首長である王「ディマ」から何段階かで階層支配している「ナーバ」(首長)への「ベレム」は、伺候や賦役、折に触れての貢ぎ物(モシ社会には、年貢のように定まった租税はなかった)によってなされる。身体の道具化は、サハラ以南アフリカ全般と同様、槌子の原理や回転原理を応用した道具がないモシ社会で、人々の身体特徴である長い前腕を、鋤の短い柄の延長のように用いる農作業(同時に、骨盤の前傾が容易にする深い前屈姿勢も利用して)や、柄のない鍛冶屋の槌(かつては、現在のような鉄の棒でなく、石塊だった)の柄として使うこと等に認められる。

詳細は参考文献にゆずるが、「三角測量」によって得られた技術文化モデル B に見出される特徴は、歴史的に辿れば、畜力・水力・風力の利用と結びついた古代西アジア農耕文化複合と、西アジア=東地中海文化起源の普遍指向の強い不寛容な一神教とに由来するものだ。「大発見時代」²⁰以後、ヨーロッパ及び 18 世紀以後は拡大された西洋が、数次のグローバル化の主導源になったのも、技術文化のモデル B に見出される、このような特徴に由来するところが大きいと言えるのではないだろうか。

²⁰ 筆者も執筆に加わり編集の状況にも接した、岩波書店発行の第一次「大航海時代叢書」(1966 年より刊行開始)の頃から、日本の印刷物で「大航海時代」という用語が、それ以前のヨーロッパ語からの翻訳である「大発見時代」に取って代わるようになった。「発見」という言葉がヨーロッパ中心であることを、「発見された」日本人の視点から是正する意図によるものであったし、それなりの理由はあるにせよ、15~16 世紀の時代状況の中に置いて考えれば、「大発見時代」と呼ぶ方が、この時代が生み出された背景を明確にする上で、歴史的意味があると筆者は考える。それは「低開発」という言葉が差別的であるとして「開発途上」という、さらに差別的な価値の一元化に基づく用語で置き換えることにも通じる(川田、1997c)、歴史認識から当事者の意志・意図や時代状況を消し去る、悪しき客観主義に基づいている。「大発見時代」という用語は、現代ヨーロッパでこの種の西洋中心主義に批判的認識を持っている、歴史家ジャック・ルゴフや人類学者クロード・レヴィ=ストロースも公の場で用いており、それだけの理由はあると筆者は考える。

4-8. 現代のグローバル化²¹

第二次大戦後の、さらに大規模で徹底したグローバル化は、「コカ・コロネーション」という語に象徴される、アメリカの商業と大衆文化の拡張として始まった。第二次大戦直後のアメリカ合衆国は、ファシズム勢力を軍事的に破る「正義の戦い」で中心的な役割を果たし、しかも主要参戦国で唯一、本土が戦場にならず、ハワイを除けば空襲も受けなかった国として経済的にも繁栄を享受し、思想的にも、冷戦構造の中で西側の世界をリードする立場にあった。

当時は「進歩」とか「繁栄」が未だ人類にとっての希望であり、破壊され疲弊した世界の人々の目に、アメリカはその目映いばかりの象徴だった。トルーマン米大統領の1949年1月、選挙後初の就任演説の、「合衆国は工業技術と科学技術の発達において抜群の国家であり…我々の技術は絶えず成長しており、尽きることがない」という言葉にも、自由世界のリーダーとしての気負いと自信が溢れている。軍用機を作るために煙草の包装紙も銀紙から蠟紙になった敗戦国日本の焼け跡で、痩せ細った子どもが、血色のいいGIがばら撒く銀紙の包装のリグレー・チューインガムの甘い香りに、アメリカ式豊かさへの憧れを文字通り嘔みしめた。

人類にとって空前の破壊の後に始まった、アメリカ主導の第四次グローバル化のその後には、ソ連の崩壊以後現在まで続く第五のグローバル化との対比で、三つの特徴を見ることができる。

その一は、大戦終結後まもなくの技術の進歩と経済的豊かさへの漠然とした夢が、地球規模での資源の枯渇や環境破壊への危機感によって消えたこと、その二は、戦後アメリカの大規模な海外援助政策の根本にあった冷戦構造が、社会主義ブロックの崩壊によって消滅し、市場原理至上の新・自由主義経済の弱肉強食が、世界を覆うようになったこと、第三に、「情報」が、異常に肥大した金融経済だけでなく、人類の精神生活全般にとってもつ意味が、極めて大きくなったことだ。第二の歯止めのない市場原理と第三の情報の肥大化とは、煽り合う関係にあり、第一の資源危機から生まれた「持続可能性」(sustainability)への配慮とは、相反する関係にある。そしてこれら三つの問題のすべてにおいて、主導的な立場にあるのがアメリカ合衆国だ。

第一の地球規模での危機感とは、特に石油危機に始まる1970年代の懐疑の時代から強まる。毛沢東思想にも影響された若者の、先進工業社会での異議申し立て、アメリカの人類学者マーシャル・サーリンズの『石器時代の経済学』(1972)に示された、生産性至上主義への懐疑、1972年ストックホルムでの「人間環境会議」の開催、エルンスト・シューマッハーの『スモール・イズ・ビューティフル』(1973)と中間技術の思想、リン・ホワイトの人間中心主義・技術万能主義批判、ローマ・クラブによる『成長の限界』(1972)、『危機に立つ人間社会』(1974)の発表、さらに1975年に終結したベトナム戦争がもたらした、アメリカ式正義と技術優越に対する深い懐疑などが、「持続可能性」という語で示される、人類規模・地球大での危機感の高まりへの、一連の底流をなしている。

持続可能性という考え方は、国連の「環境と開発に関する世界委員会」(通称ブルントラ

²¹ この節に記した内容は、国際開発学会第17回全国大会「サステナビリティ」検討部会(2006年11月25日、本郷、東京大学)の基調講演「誰にとっての持続的開発か 一文化人類学徒からの発言」での口頭発表に部分的に基づいている。

ント委員会)が1987年に出した報告書 *Our Common Future* を始め、現実の政策としての社会主義の大幅な敗退、弱肉強食の市場原理の世界支配、つまり人間の欲望追求の拡大は放置したままでの、地球規模での資源枯渇・環境破壊に対する危機感の高まりと、時を同じくして重視されるようになった。

「持続可能性」は、開発の指針ないし戦術としてそれまで取り上げられ変遷してきた、「工業化」、「農村開発」、「中間技術」、「住民参加」、「観光開発」などが行き詰まったあとに、具体的な戦術を含まないスローガンとして出て来たと言える。開発問題との関わりでは「持続可能な開発」ということになるが、具体策はそれぞれの現場に任されている。

いずれにせよ、世界の人口が増え続け、特にインドとサハラ以南アフリカでの人口増加率が高い状況で(EUの1年間の人口増加は、インドでの1週間分に当たるといふ)、長期的に見れば「持続可能性」は、原理として不可能な人間の願望であると言える。

現在開発問題に求められているのは、根本的なパラダイム、考え方の枠組みの変換だ。局所療法、対症療法が多くの困難に直面している現状で、人間の技術と、ヒト=自然関係のあり方についての、パラダイムの根源的再検討と変換への模索が必要だ。それは生物の単一の種(species)として現在でも69億余り、40年後には91億5千万(国連人口基金2010年版『世界人口白書』による)という個体数に達するホモ・サピエンスが、他の多くの生物種を日々絶滅させながら抱えている、出口の見えない難問でもある。

5. 種間倫理を求めて

5-1. 自然史の一過程としてのヒト

冒頭にも述べたように、筆者の関心はヒトを他の生物と共通の視野で、「知覚=運動有機体」の一種と見て、自然史の一過程としてヒトとその文化を考察することにある。前節末に見た、他の生物種との関係でヒトが直面させられている「出口の見えない難問」は、必然的に種間倫理のあり方へと、ヒトを導いて行く。

最近著しく精緻になった霊長類学者の研究成果によっても、ヒト以外の霊長類を含む生物の行動には、自制が働いている。欲望の追求、攻撃性の発露に際限がないのはヒトだけのように思われる。だが、なぜそうなのか。自制のなさ、知恵のある人に生まれつき組み込まれている本能なのか、それともヒトが直立二足歩行以後に獲得した「文化」によって付け加えられたものなのか。文化、とくに月にまで到達した科学技術の進歩に人々が喝采する一方、20世紀は未曾有の規模で、ヒト同士の大量殺戮が行われた世紀だ。ヒト同士が大規模に殺し合っただけでなく、「知恵のある人」がその技術力で、ヒト以外の種の生物を無制約に殺し、生態系の調和を危うくしたのも20世紀だ。

第二次大戦後の20世紀後半には、植民地帝国の崩壊にともなって、旧植民地が旧態依然たる19世紀ヨーロッパ・モデルの国民国家の体裁をとって独立し、世界が歴史上初めて国民国家で覆われたが、同時に国民国家という枠組みの形骸化も明らかになった。大部分の国民国家は、経済上、防衛上自立できないだけでなく、国民の忠誠の拠りどころでもありえなくなった。第二次大戦後も、世界に戦乱と殺し合いは絶えないが、国家対国家の、宣戦布告をとまなう国際法上の戦争はただの一度もない。国家というものが、自己同定の基盤、献身の対象として、敵味方を分ける意味を喪失したのだ。宣戦布告も正当な理由もな

い大国による軍事侵略はテロではないが、それに抵抗する、しばしば自己犠牲をとまなう小規模な攻撃はテロと呼ばれる。そこでは、敵味方の区別のあり方の混迷は、極限の様相を呈する。

国家の形骸化は、少数の大国と国際企業主導の経済のグローバル化にともなう、地域間の貧富の格差、大部分の貧しい地域の一国内の貧富の格差の拡大によっても、一層押し進められたと言える。

敵と味方、同類と同類でないものの区別のつけ方が判りにくくなってきたことは、ヒトとヒトのあいだだけではなく、ヒトとヒト以外の生物についてもいえる。食肉用のウシは何十万頭殺しても残酷ではないが、クジラは賢く愛らしい動物だから保護すべきだといった理屈が国際会議で罷り通る一方で、情緒不安定なヒトが求める動物ペットの範囲も、人類最古の伴侶イヌから、ヘビのような生物にまでエスカレートしてきた。ウシの BSE は、ヒトが拡大されたカーニバリズム(人肉嗜食)である肉食慣行を節度なく募らせた挙げ句、ヒトが食べるウシを効率よく肥育するためにウシに共食いを強いた報いだとする、人類学者レヴィ=ストロースの警告(レヴィ=ストロース 2001 (1996))が、日本でも反響をよんだ。

誰(何)は殺し(食べ)てもいいが、誰(何)はいけないという区別のつけ方の問題は、いまやヒトの安全で快適な生活のための便宜といった次元を超えた、ヒトとヒト、ヒトとヒト以外の生物との間にあるべき掟、いわば倫理の問題として考えられなければならないところに来ているのではないだろうか。

5-2. 食における同類と非同類

戦い以外で、同類と非同類の区別の立て方が最も尖鋭な形で現れるのは、生物にとって個体維持と種の維持に直結する本能に発しているながら、それをめぐってヒトが生みだした文化でもある、摂食と性行為においてであろう。

儀礼としての食人の習俗がさまざまな社会にあったことは知られているが、どの範囲までの生物なら食べてよいという掟は、文化によって異なる (川田 2007 (2003))。

この点について、宮沢賢治の未定稿の童話『ビヂテリアン大祭』は、考える鍵を与えてくれる。賢治のいう「ビヂテリアン=菜食信者」の世界大会がニューファウンドランドであり、そこヘシカゴの畜産組合の宣伝車が乗り込んで来て、反ビヂテリアンのピラを撒き、菜食主義の是非をめぐって、両者のあいだに激論が戦わされる。その議論が賢治流のユーモアに溢れていて面白いのだが、反ビヂテリアンが菜食信者の矛盾をつく論旨は、二つの点に要約できる。第一は、野菜を栽培する行為自体が、土の耕起、害虫駆除、魚粕など動物性肥料の使用などによって、すでに他の生物の犠牲の上に成り立たざるを得ないという点であり、第二は、生き物としての動物と植物は、アミーバー、バクテリアなどを経て連続しており、厳密な区別はできない、植物にも意識があるかも知れないし、動物を食べないという論理を押し進めれば、植物も食べることをやめるべきで、結局人間は餓死し、そのあと他の動植物が食ったり食われたりするだけだ、という点である。

仏教信者としての宮沢賢治の立場は、すべての生物はみな、無量の昔から流転を重ねてきた長い間の親子兄弟であり、いま人間でいる者も、ある時は畜生の中に生まれている。あらゆる生物に対する愛こそが大切だ、どうしてそれを殺して食べることができようという、こまごまとした論理を超えたものだ。言葉を変えてこの立場を解釈すれば、他の生命

の犠牲によってしか生きるすべのない人間の悲しい業を自覚し、生きること自体が含む矛盾を受け入れ、自覚することでそれを超えようとする態度といえるだろうか。

かつて東京佃島にフランス人の学者を案内したとき、住吉神社の境内に「鯉塚」と刻んだ大きな石碑があり、それを建てたのが日本橋の鯉節業者の組合であることを知った。日本には、人間が生きるためにしている殺生の犠牲になった生き物を供養して、塚を建てる仕来りがあること、かつて東京に蔓延する恐れがあったペスト対策でネズミを大量に殺した時でさえ、そのネズミたちを供養するために建てた立派な鼠塚が東京にあることを、筆者はそのフランス人に説明するのに、筆者自身を納得させる意味も含めて、苦心したことがある。明快を第一とする論理からいえば、偽善と見做され得るような供養や塚の考え方は、だが筆者が「創世記パラダイム」と名付けている、神は己の姿に似せて人間を創り、他の動物を人間のために創ったという前提にもとづく、いわば確信犯としての動物利用とは、人間も他の生き物と同等に生きているという前提において、異なっていると筆者は考えたいのである。

確かに「創世記パラダイム」に支えられたキリスト教世界のヒト中心主義は、19世紀の科学技術の発達、産業革命と相俟って、近代ヒューマニズムの基盤になったと言えるだろう。だが20世紀後半以降、ヒトをめぐる状況が暗転したことは、既に述べた通りだ。

『創世記』によれば、神は人間を創ってから、「産めよ、増えよ、地に満ちよ」と命じた。だが、人口爆発の危機を抱えている現代の人類は、最早この神の言葉に従うことはできない。1995年カイロで開かれた国際人口開発会議でも、結局一致した結論に達することはできなかった。人口問題が、開発問題と重ね合わせで問題化するところに、現代の苦悩がある。少子化を進めている先進国側は、相変わらず出生率の高い低開発国側に対して、家族計画によって人口増加を抑えるよう強調したが、例えば熱帯アフリカの焼畑農耕生活にとっては、子どもが生まれ働き手が増えれば現実に農耕生産が増えて豊かになるだけでなく、後生を弔ってくれる子孫が大勢いることを心強く思う来世観とも結びつく。アフリカ、インドなど、暫く前までの日本もそうだったように、子宝を増やすことに人生の大きな価値を見出す世界観は、現代では「創世記パラダイム」とは無縁な非キリスト教国の方に根強い。このような開発の南北関係の中に置いて見ると、家族計画という名の産児制限は、既に生まれた者の生活水準の既得権を守る、一種の予防殺人の様相さえ呈してくる。

どの範囲までの生き物を、非同類として食べてよいかという同類と非同類の境のつけ方も、いま述べたような「創世記パラダイム」に基づくヒト中心主義 (anthropocentrism) を否定するところから、本当の自由な議論が始められるだろう。

5-3. 性における同類と非同類²²

性行為も、種の維持という本能に基づいてはいるが、ある意味ではいま見た摂食行為以上に、文化に強く彩られている。近親者同士の性行為が禁忌とされている一方で、余り距たったもの、つまり異類との性交もタブーとされる。どちらも実際に起こるから禁忌の対象となるのである。

性行為が禁忌とされる、あるいは逆に推奨される近親者の範囲は、社会によって異なる。

²² この節(5-3)に記した内容は、拙稿(川田 2001)に部分的に基づいている。

世界の始まりを伝える神話・伝説では、洪水の後に残った母と息子、兄と妹のように、近親者同士の性行為から子孫が増えてゆくが、アダムとイヴ、イザナギとイザナミのように、原初の二人は近親者同士でなくとも、その二人から生まれた兄妹または姉弟が子を作らなければ、子孫は増えて行かない。古代エジプトの地母神イシスとその息子であり夫でもある穀精オシリス、古代メキシコの地母神＝穀神テテオインナンの夫である穀神マイクルシヨチトルと同視される息子のシンテオトルなど、母子相姦の色彩の強い地母と穀精のカップルも、世界の始源にかかわる神話に登場する。古代エジプトやインカのように、王族が血の純粹、神聖を保つために、王族内で結婚した例もある。奄美のオナリ神の起源伝説に語られている、別れ別れに暮らした兄妹がめぐり逢い、兄は妹をそれと知らず犯し、妹は兄と知りつつ受け入れたうえで自死し、共同体によって神として祀られたという伝承や、日本で広く採録されている、兄妹相姦と神（道祖神）の由来を結びつける伝承も、人間が近親相姦にある種の聖性を付与していることを示している。

島崎藤村は、同居していた姪（兄の娘）に子をませた罪の意識を描いた『新生』で、亡妻の位牌のある仏壇に触れた姪の掌に、不気味な血がべっとりと付く凄惨な叙述をしている。だが古代ギリシャでは「イエ」（オイコス）の継承者としての息子が生まれなかった場合、家付き娘は、父の兄弟、つまりその娘にとっての伯（叔）父と結婚しなければならなかった。

アラブ社会では、一般に父方平行イトコ婚（兄弟の子同士の結婚）が推奨されるが、日本でも、本家分家関係が重視されてきたような地方で、本分家の絆を強めたり、財産の分出を防ぐために、父方平行イトコ婚が好まれることが多かった。

他方、異類との性交については、人間の男性とロバ、ウシなどの家畜の牝との獣姦は、ブラジル東部のサトウキビ大農場についてのフレイレの研究書『大邸宅と奴隷小屋』にも記されているし、アフリカのモシ社会（ブルキナファソ）では、ロバとの性交を目撃された男は、木に首を吊って自殺しなければならず、葬儀は出さないという慣行があった。

『延喜式』の大祓祝詞にも「畜犯せる罪」^{けもの}は、「天つ罪」に対する「国つ罪」として、「おのが母犯せる罪、おのが子犯せる罪、母と子と犯せる罪、子と母と犯せる罪」について挙げられており、『旧約聖書』「レビ記」にも、獣姦は、男性の同性愛、月経中の女性との性交、姦淫と並んで重罪として挙げられている。このことから、遠く隔たったこの二つの地域で、異類との性交が、現実に行われていたことが窺える。

説話では、異類婚姻譚として分類される説話群があるが、ヒト以外の動物（場合によって植物）との婚姻のあり方、その結末、生まれた子の行く末などは、文化によって著しく異なっている。日本では異類婚姻譚がきわめて豊かであるだけでなく、そこから生まれた子が、超能力をもつとされることもある。平安中期の高名な陰陽家で著書も遺している安倍晴明（921～1005）も、キツネを母として生まれたと言われ、芸能化もされて広く流布している「葛の葉子別れ」伝説と、歴史上実在とされる人物像との境も定かでない。『古事記』によれば、神武天皇の母（玉依姫）も、父の母（豊玉姫）も海神の娘で、ワニ（サメ類の古名）とされている。

5-4. ヒト中心主義を超えて

ヒトとヒト、ヒトとヒト以外の生物とのあいだの、現実の、あるいは神話、伝承の次元での、同類と非同類の境目の入れ方が、ヒトの作り出した文化によって多様であるさまの一端を見てきた。こうした検討のあとでは、西洋近代を生む支えとなった「創世記パラダ

イム」のヒト中心主義が、普遍性を示すどころか、世界把握のあり方の一つに過ぎず、しかも現代にヒトが直面している状況で、明らかな行き詰まりを示していることが分かる。

自己中心主義 (egocentrism)、自民族中心主義 (ethnocentrism) など、ヒトという同類の中で己や己の狭い同類を中心に据える立場は、ヒトの聡明さによって否定されて来た。そして地球と太陽との関係で己を中心に据える天動説＝地球中心主義 (geocentrism) も、オーレム、コペルニクス、ガリレイ、ケプラー、ティコ＝ブラエ等々の数百年の努力の果てに、19世紀半ばのフーコーの振り子の実験によって、誰にも納得できる形で否定された。次に乗り超えられなければならないのは、「創世記パラダイム」によって西洋近代を支えてきた、ヒト中心主義 (anthropocentrism) であろう。

ヒト中心主義が主張するように、ヒトは他の生物たちの主人として、それらを支配し利用する権利をもって地球上に現れたのではない。遅れて生物界の仲間入りをしたヒトも、他の生物と同じく、己の意志と責任で地上に存在し始めたわけではなく、束の間の存在として他律的に生を享けたという自明の事実を確認することから始めなければならない。ヒトにとっての快適さ、アメニティーのためにではなく、ヒトとヒト以外の生物のあいだにあるべき掟を探る努力をすること、それはヒトを超えた種間倫理 (interspecific ethics) を探求することだ。

だがいくらヒトを超えたところにとっても、そう考える主体がヒトである以上、ヒトの主観からしか考えることができない。その限りでヒト主体の (humancentered) ものであるが、現代社会における人間疎外に対しては、ヒト主体であることも併せて求めてゆくべきだろう。

6. 結 語

ヒトは、宇宙の内面の皮膚に、ふとした自己異化の作用で生じた「できもの」であり、宇宙のそれこそ小さな自意識のような存在であるのだろう。それでいてヒトは、時間の始めと終わりを、空間の最大と最小のものを知ることが、原理として不可能だということを実感しており、己が存在し始めたことにも責任を持ってない極めて曖昧な「過程」として、ある期間浮遊している(川田 2005)。

だが同時に、ヒトは全身穴だらけの開放系として存在する。頭部には摂食、呼吸、知覚、発話など、個体維持や他の個体との交わりのための主要な穴があり、下半身には排泄、生殖、出産、つまり個体と種の維持に不可欠の穴たちがある。授乳する女性の乳首は種の維持のための穴であり、全身の皮膚は無数の毛穴で外界と結ばれている(川田 2010)。

ヒトが仮そめの開放系として、やはり開放系であるヒト以外の動植物とつながっているという事実は、筆者が青年時代アフリカのサバンナの闇夜に裸で寝そべっていて、自分の吐く息をあのバオバブの葉が吸い、自分の吸う息は、穴の奥でじっと目を開いているかも知れないネズミの吐く息だということを実感して、知ったことだ(川田 1976(1973): 230)。

こうした仮そめの開放系としてのヒトと、ヒトが作り出した文化を、自然史の一過程として、ヒトが作り出した文化の一部である学問的知見に頼って位置づけて見たいという筆者の想いが、極めて不十分ながら本稿を生み出した。読者の叱正を得、今後の探究によって補正して行きたい。

主要参考文献

芦澤 玖美

2006 「中国内モンゴルの若者の身体形状の特性」、『人類文化研究のための非文字資料の体系化』3、神奈川大学 21 世紀 COE プログラム: 183~187 頁。

芦澤 玖美他

1997 「身体技法と身体特徴——西アフリカ人 5 集団と日本人の比較」、川田順造 (編) 『ニジェール川大湾曲部の自然と文化』、東京大学出版会: 397-417 頁。

芦澤 玖美 (編)

2004 『生業活動に伴う身体技法と体形の関連性に関する研究』(平成 12~15 年度科学研究費補助金(基盤研究 A(1))研究成果報告書、大妻女子大学人間生活科学研究所。

足立 和隆他

1993 「西アフリカ諸民族生体計測調査(その 1)——身体技法との関連」、『アフリカ研究』43、日本アフリカ学会: 1-30 頁。

アルテール, アンナ&シェルシェーヴ, ペリーヌ

2006(2003) 『体位の文化史』、藤田真利子・山本規雄訳、作品社。

今井 啓雄

2007 「感覚受容体の退化と進化」、京都大学霊長類研究所 (編) 『霊長類進化の科学』、京都大学出版会: 476-486 頁。

内田 亮子

2010 「人間の理解と進化人類学」、『生物の科学遺伝』64、エヌ・ティー・エス: 13-17 頁。

オランダール, モーリス

1995(1989) 『エデンの園の言語 アーリア人とセム人: 摂理のカップル』、浜崎設夫訳、法政大学出版会。

川田 順造

1967 「十五世紀のアフリカと地中海世界」、アズララ, カダモスト 『西アフリカ航海の記録 大航海時代叢書第 1 期 2』、岩波書店: 25-61 頁。

1976(1973) 『曠野から』、中公文庫。

1990 「「善き野蛮人」から「野生の思考」へ——“未開”社会とヨーロッパの意識」、二宮宏之 (編) 『深層のヨーロッパ』「民族の世界史」9、山川出版社: 193-224。

1991(1979) 『サバンナの博物誌』、ちくま文庫。

1992(1988) 「身体技法の技術的側面——予備的考察」、『西の風・南の風——文明論の組みかえのために』、河出書房新社: 64-122 頁。

1992(1989a) 「なぜ「未開」概念を問題にするか」、同上『西の風・南の風』: 37-63 頁。

1992(1989b) 「もう一つの“南蛮”時代——16 世紀のポルトガルとベニン王国」、同上『西の風・南の風』: 314-326 頁。

1995a 「人種」、松原正毅 (編) 『世界民族問題事典』、平凡社: 540-541 頁。

1995b 「民族」、松原正毅 (編) 『世界民族問題事典』、平凡社: 1117-1119 頁。

1997a 「伝統的技術の中の身体技法」、川田順造 (編) 『ニジェール川大湾曲部の自然と

- 文化』、東京大学出版会：317-358頁。
- 1997b 「ことばの多重化=活性化——アフリカの体験から」、三浦信孝（編）『多言語主義とは何か』、藤原書店：18-33頁。
- 1997c 「いま、なぜ「開発と文化」なのか」、川田順造他（編）『岩波講座 開発と文化 1』、岩波書店：1-57頁。
- 1997d 「人間中心主義のゆくえ」、川田順造他（編）『岩波講座開発と文化 3』、岩波書店：1-16頁。
- 1998 「開発と伝統的技術」、川田順造他（編）『岩波講座開発と文化 7』、岩波書店：259-281頁。
- 1999 「「民族」概念についてのメモ」、『民族学研究』63(4): 451-461頁。
- 2001 「性——自己と他者を分け、結ぶもの」、川田順造（編）『近親性交とそのタブー』、藤原書店：9-30頁。
- 2004 『人類学的認識論のために』、岩波書店。
- 2005a 「開かれた過程としての生命」、『巨福』81、臨濟宗建長寺派宗務本院：6-11頁。
- 2005b 「メキシコと内蒙古住民の身体技法についての調査の初次的報告——人力運搬法と座法を中心に——」『人類文化研究のための非文字資料の体系化』2、神奈川大学：219-238頁。
- 2006 「感性の人類学のための予備的覚え書き」『人類文化研究のための非文字資料の体系化』3、神奈川大学：175-182頁。
- 2007 (2003) 「人は肉食をやめられるか」『文化人類学とわたし』、青土社：157-168頁。
- 2008 (1994) 「西洋の衝撃に非西洋はどう対応したか——16世紀と19世紀の日本とアメリカ」、『文化の三角測量 川田順造講演集』、人文書院：141-162頁。
- 2008 (2008) 「ヒトとモノのかかわり合い方について考える」、同上『文化の三角測量』：205-281頁。
- 2010a 「種間倫理を求めて」、『大法輪』77(10)、大法輪閣：36-37頁。
- 2010b 『日本を問い直す——人類学者の視座』、青土社。
- 川田 順造（編）
- 1989 『「未開」概念の再検討』I、リプロポート：11-33頁。
- 川田 順造・福井 勝義（編）
- 1988 『民族とは何か』、岩波書店。
- 香原 志勢（編）
- 1982 『人力運搬の人類学的・働態学的研究』、昭和56年度科学研究費補助金(総合研究A)研究成果報告書。
- 国立科学博物館（編）
- 2010 『大哺乳類展:陸のなかまたち』(2010年3月13日~6月13日)図録。
- 庄司 博史
- 1995 「民族としてのサーミ人の誕生:北欧の近代国家建設のなかで」、川田順造（編）『ヨーロッパの基層文化』、岩波書店：229-245頁。
- ストリンガー、クロス & ピーター・アンドリュース
- 2008 『ビジュアル版 人類進化大全』、馬場悠男・道方しのぶ訳、悠書館。

高井 正成

- 2007 「サルの子供の誕生」、京都大学霊長類研究所(編)『霊長類進化の科学』、京都大学出版会:15-28頁。

外池 光雄

- 1989 「香り」、大山正・秋田宗平(編)『知覚工学』、福村出版:156-170頁。

ドレント, イェルト

- 2005(2001) 『ヴァギナの文化史』、塩崎香織訳、作品社。

葉山 杉夫

- 1993 「二足性への体制の進化」『日本理学療法誌』10:12-33頁。

葉山 杉夫(編)

- 1991 『化石人類を含む霊長類声門の機能分析のための技術開発』、平成2年度科学研究費補助金(試験研究B:研究課題番号63840026)研究成果報告書。

- 1993 『二足性を獲得した周防猿まわしサルの生体維持機構の追跡調査』、平成4年度科学研究費補助金(一般研究C:研究課題番号03640683)研究成果報告書。

原 聖(編)

- 2010 『ことばと社会 別冊3 言語的多様性という視座』、三元社。

フレイレ, ジルベルト

- 2005(2001) 『大邸宅と奴隷小屋——ブラジルにおける家父長制家族の形成(上下)』、鈴木茂訳、日本経済評論社。

三木 成夫

- 1983 『胎児の世界』、中公新書。

- 1992 『生命形態学叙説——根源形象とメタモルフォーゼ』、うぶすな書院。

山内昭雄・鮎川武二

- 2001 『感覚の地図帳』、講談社。

レヴィニストロース, クロード

- 2001(1996) 「狂牛病の教訓」川田順造訳『中央公論』4月号:96-103頁。

ワトソン, ライアル

- 2000(2000) 『匂いの記憶——知られざる欲望の起爆装置:ヤコブソン器官』、且敬介訳、光文社。

Barry, Abdoulaye

- 1990 “Étude de plurilinguisme au Mali”, in J. Kawada (éd.) *Boucle du Niger : Approches multidisciplinaires*, Volume 2, Tokyo: Institut de Recherches sur les Langues et Cultures d'Asie et d'Afrique : pp.183-210.

Balfet, Hélène

- 1973 “À propos du tour de potier: l'outil et le geste technique”, in *L'homme, hier et aujourd'hui: recueil d'études en hommage à André Leroi-Gourhan*, Paris: Éditions Cujas : pp. 109-121.

Bizzozero, Vittorio

- 1997 *L'Univers des odeurs: Introduction à l'olfactologie*, Genève, Éditions Médecine

et Hygiène, Dpt. Livres Georg.

Blacking, John

1977 "Towards an anthropology of the body," in Blacking (ed.) *The anthropology of the body*, London/New York/San Fransisco: Academic Press : pp. 1-28.

Boas, Franz

1955(1927) "Chapt.V Style," in *Primitive art*, London/New York/San Fransisco: Academic Press: pp. 144-183.

Corbin, Alain

1986(1982) *Le miasme et la jonquille: L'odorat et l'imaginaire social XVIIIe-XIXe siècles*, Paris: Flammarion.

De Reyniès, Nicole

1987 *Le mobilier domestique*, I, II, Inventaire général des monuments et des richesses artistiques de la France, Paris: Ministère de la culture et de la communication.

Douglas, Mary

1970 "The two bodies," in *Natural symbols: Explorations in cosmology*, New York: Pantheon Books : pp. 65-81.

Haudricourt, André G.

1948 "Relations entre gestes habituels, forme de vêtements et manières de porter les charges", *Revue de Géographie Humaines et Ethnologie* 1(3): pp. 58-67.

Kawada, Junzo

1988 "Les techniques du corps et la technologie traditionnelle: remarques préliminaires", in Kawada (éd.) *Boucle du Niger: approches multidisciplinaires*, Vol.1, Tokyo: Intitut de Recherches sur les Langues et Cultures d'Asie et d'Afrique: pp. 83-96.

1990 "Techniques du corps dans la technologie traditionnelle," in Kawada (éd.) *Boucle du Niger: approches multidisciplinaires*, Vol.2, Tokyo: Intitut de Recherches sur les Langues et Cultures d'Asie et d'Afrique: pp. 111-180.

1991 "Notes on "the Techniques of the Body" among West African peoples," *Journal of the Anthropological Society of Nippon*, 99(3): pp. 377-391.

2000 *The Local and the Global in Technology*, World Culture Report Unit, Paris: UNESCO.

Kawada *et al.*

1992 "Les techniques du corps et les caractéristiques morphologiques des deux populations ouest-africaines," in Kawada (éd.) *Boucle du Niger: approches multidisciplinaires*, Vol.3, Tokyo: Intitut de Recherches sur les Langues et Cultures d'Asie et d'Afrique Première partie: Réflexions sur les facteurs culturels, pp. 125-168; Deuxième partie: Étude somatométrique, pp.169-222; "Techniques of the Body and Morphological Characteristics of Two Ethnic Groups of West Africa," Part I: Reflexions on Cultural Factors, pp.223-242; Part II: A

Somatometrical Study: pp. 243-258.

Kealiinohomoku, Joann

1976 "A comparative studies of dance as a constellation of moter behaviors among African and U.S. Negroes," *Dance Research Annual*, 7: pp. 17-178.

Koechklin, Bernard

1961 "Techniques corporelles et leur notation symbolique" *Langage* 10: pp. 36-47.

Leroi-Gourhan, André

1943 *L'homme et la matière*, Paris: Albin Michel.

1945 *Milieu et techniques*, Paris: Albin Michel.

1965 *Le geste et la parole II : La mémoire et les rythmes*, Paris: Albin Michel.

Lomax, Alan

1968 *Folk song style and culture*, Washington D.C., American Association for the Advancement of Science, Publication No. 88.

Loux, Françoise

1978 *Le jeune enfant et son corps dans la médecine traditionnelle*, Paris: Flammarion.

Massin

1978 *Les cris de la ville: Commerces ambulants et petits métiers de la rue*, Paris: Gallimard

Mauss, Marcel

1950(1936) "Les techniques du corps," in *Sociologie et anthropologie*, Paris: Presses Universitaires de France : pp. 363-386.

Raclot, Michel

1979 *La vie d'une campagne au siècle dernier*, Rosheim: Éditions Jean-Pierre Gyss.

Roundnitsuka, Edmond

1980 *Le parfum*, Paris: Presses Universitaires de France, Collection "Que Sais-Je" No. 1888.

Sigaut, François

1984 "Essai d'identification des instruments à bras de travail du sol," *Cahiers ORSTOM*, série Sciences Humaines 20 (3-4): pp. 359-374.

Vigarello, Georges

1987(1985) *Le propre et le sale: L'hygiène du corps depuis le Moyen Âge*, Paris: Éditions du Seuil.

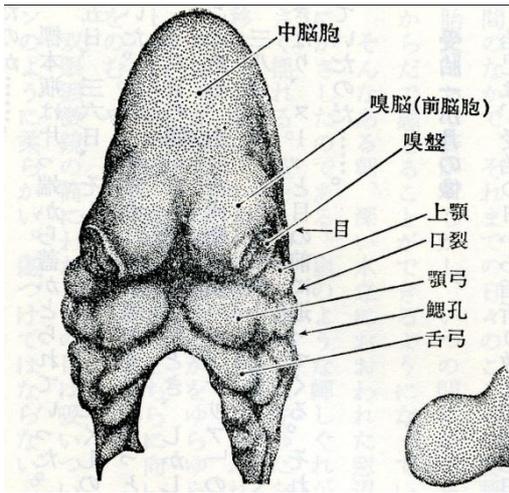


図1 『胎児の世界』(三木 1983)より

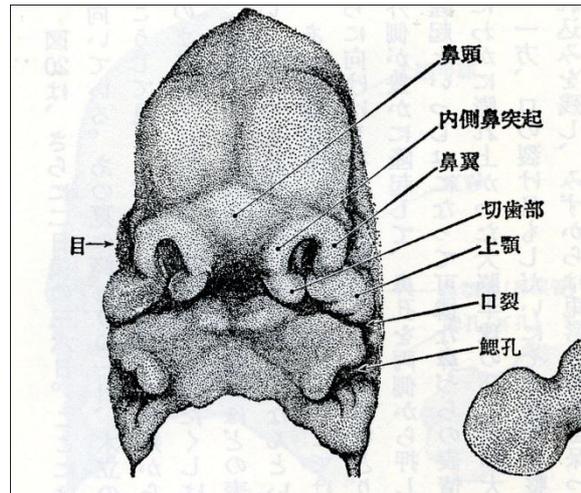


図2 『胎児の世界』(三木 1983)より

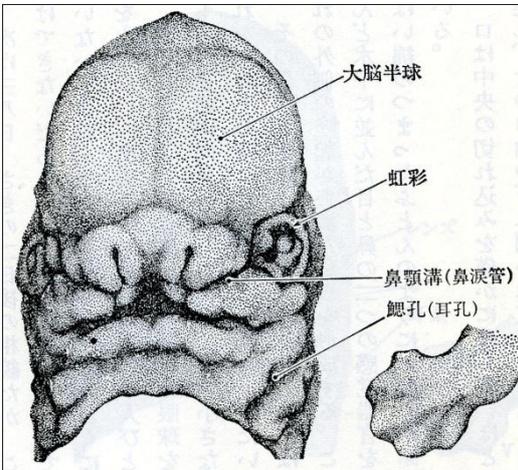


図3 『胎児の世界』(三木 1983)より

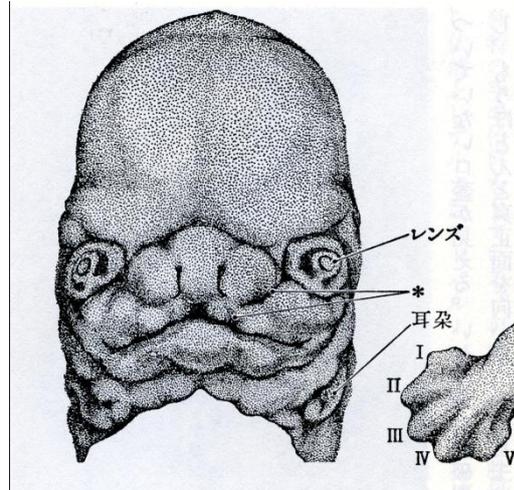


図4 『胎児の世界』(三木 1983)より

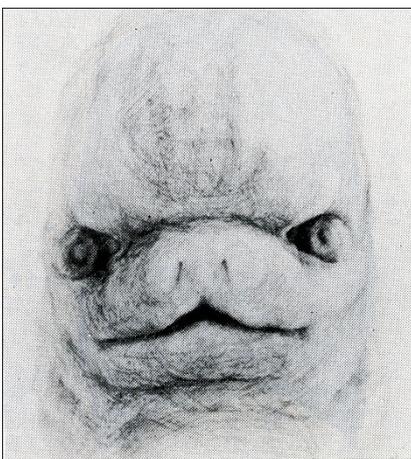


図5 『胎児の世界』(三木 1983)より

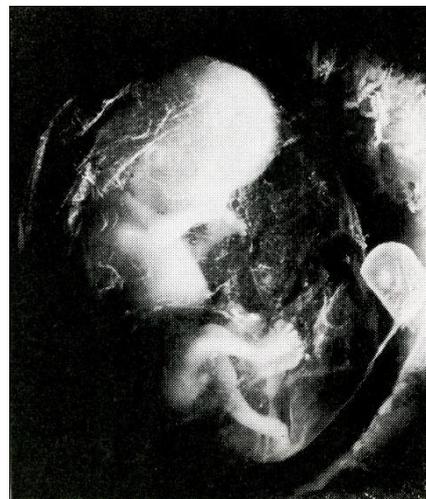
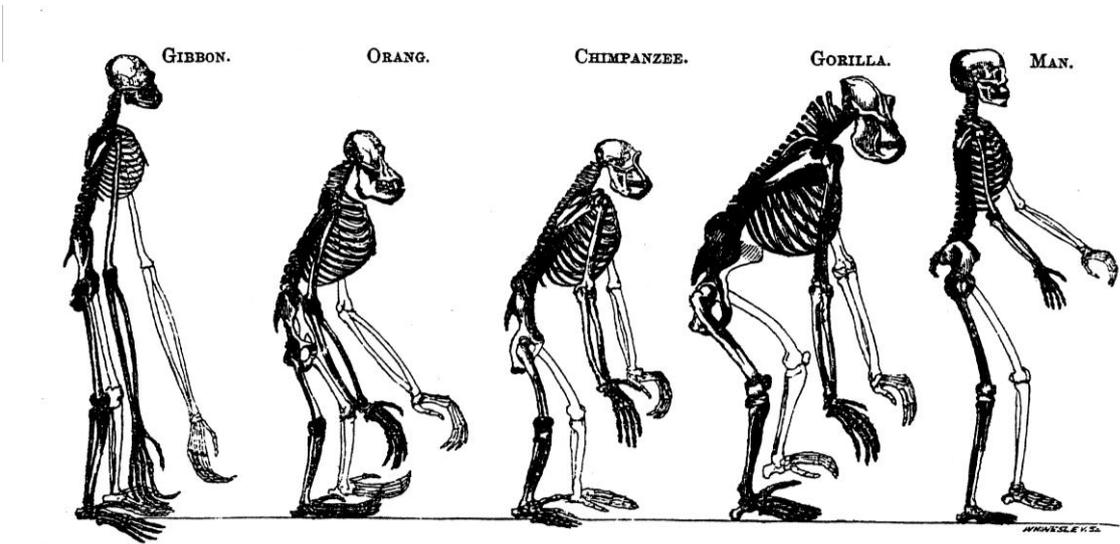


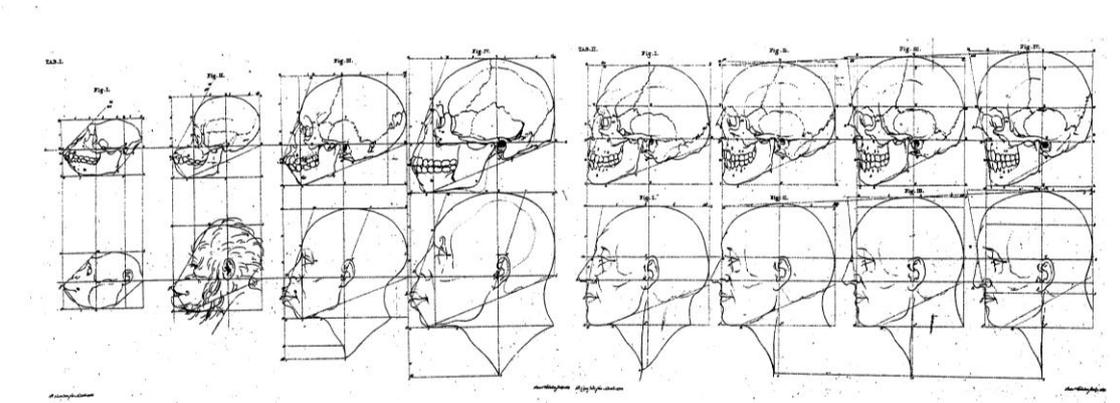
図6 『胎児の世界』(三木 1983)より



☒ 7 T'M 266-01-060-1, "Toumai", *Sahelanthropus tchadensis*



☒ 8 T. H. HUXLEY *Evidence as to Man's Place in Nature*, London, 1864 より



☒ 9 P.CAMPER *Dissertation physique de Mr.P.Camper*, Paris, 1791 より

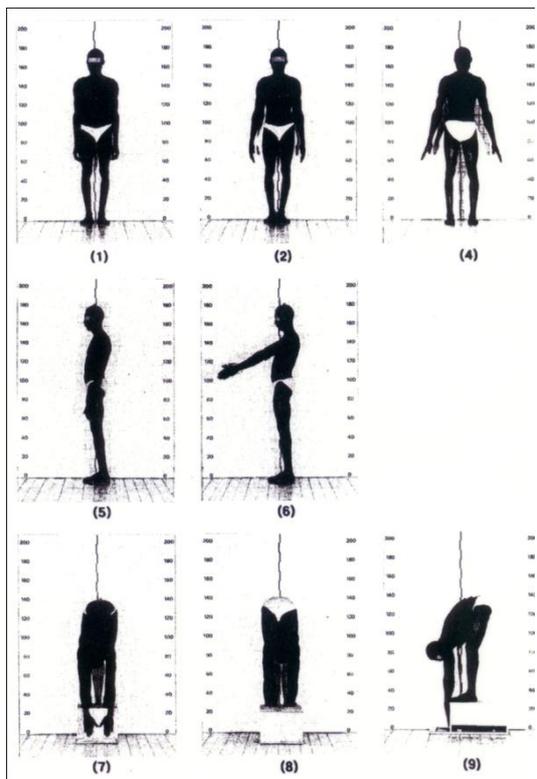


図 10

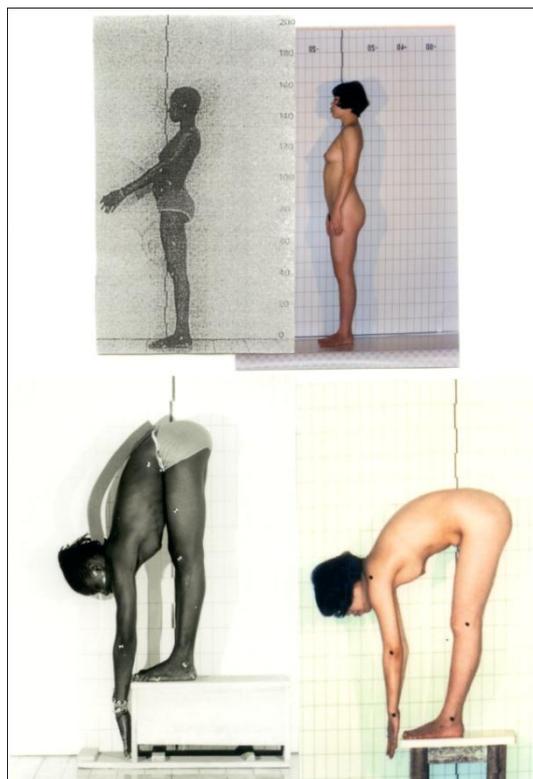


図 11



図 12 右下の1点を除く3点 ブルキナファソ南部で(1977年、筆者撮影)、
右下の1点 ナイジェリア西南部で(1991年、筆者撮影)

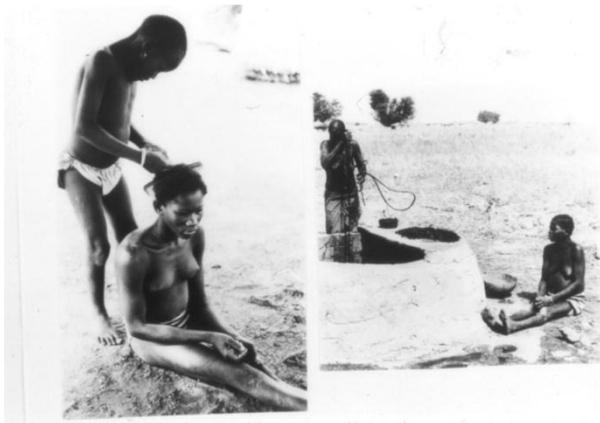


図13 ブルキナファン南部で (1977年、筆者撮影)



図14 マリ中部で (1986年、筆者撮影)

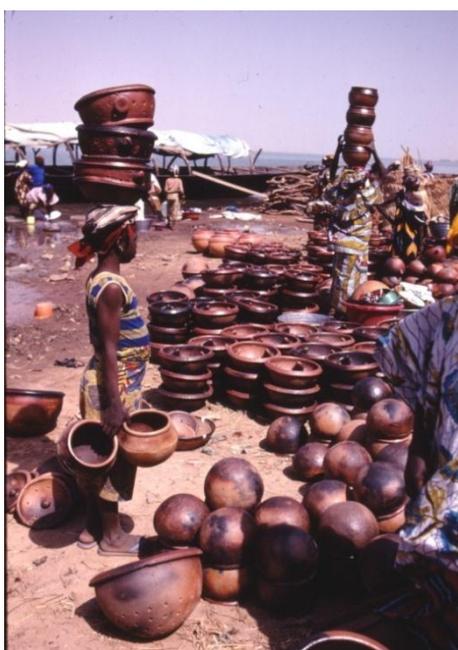


図15 マリ中部で (1988年、筆者撮影)



図16 マリ中部で (1988年、筆者撮影)



図17 ブルキナファン南部で (1977年、筆者撮影)

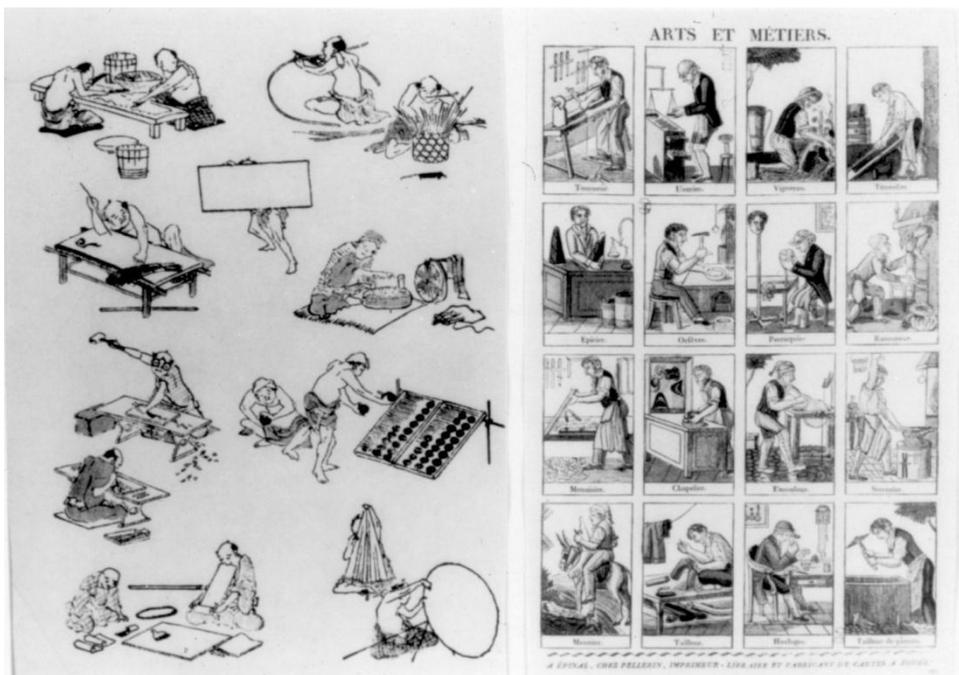


図 18 左は 19 世紀前半の江戸諸職を描いた『北斎漫画』より、
右は民衆版画で名高いエピナル（フランス東部）のペルラン作（1825 年頃）
のフランス諸職図



図 19 オルレアン（フランス中北部）の版画家ルブロン作（1775 年頃）、
（パリ・カルナヴァレ博物館蔵）



図20 モンゴル西部で (2005年、筆者撮影)



図21 メキシコ南部で (2004年、筆者撮影)



図22 アイヌの前頭帯による背負い運搬
『蝦夷古代風俗』(函館市立図書館蔵)



図23 サツマイモをテイルで運ぶ少女
(沖縄県国頭村、1973年、須藤功
撮影)、須藤功『運ぶ』(竹田且他編
「フォークロアの眼」3)、国書刊行会、
1977年。



図24 年のゆかない少女もテル(この地方の呼び名)を担いで畑仕事に(鹿児島県徳之島、
1968年、伊藤碩男撮影)、前掲、須藤功『運ぶ』による。



図25 ブラジル中西部で(1984年、筆者撮影)



図26 前頭帯でなく、胸の上部から紐や布で背負う(メキシコ南部で、2004年、筆者撮影)

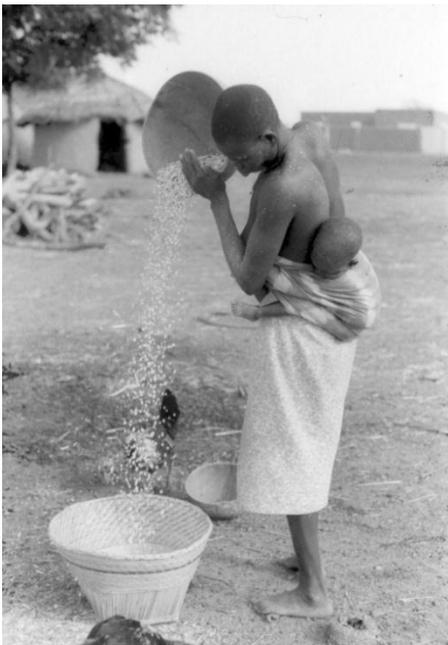


図27 ブルキナファソ南部で(1977年、筆者撮影)



図28 ブルキナファソ南部で(1988年、筆者撮影)



図29 上左、ジョルジュ・ド・ラ・トゥール画『新生児』(17世紀前半)、
上右、乳母に抱かれたレイ14世(1638生まれ)、作者不詳
下、赤子の脚を伸ばして固定した木の揺籃、パリ、フランス民俗博物館絵葉書



図30 19世紀のノルマンディー
(フランス北西部)で、赤子筒
に入れられた幼児たちを描い
た絵、作者不詳(ルーヴィエ市
立博物館蔵)

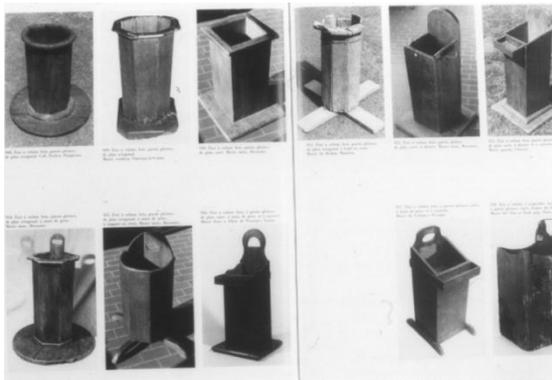


図 31 フランス各地の博物館所蔵の「赤子筒」
(De Reyniès, 1987 による)

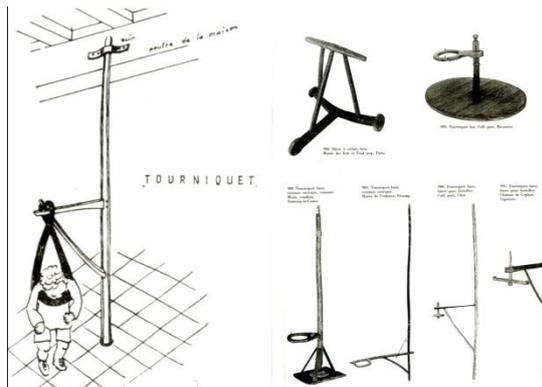


図 32 左、「赤子吊り」の図 (Loux, 1978 による)、右、フランス各地の「赤子吊り」や、つかまり立ち台
(De Reyniès, 1987 による)



図 33 一服時の授乳、「エヅメ」に入れられた子
(秋田県横手、1964年)、稲雄次他編
『写真資料「秋田の民俗」』、秋田市、
無明舎出版、1992年による。



図 34 赤子の姿勢は日本式「おんぶ」
に近い、布の胸上部背負い
(メキシコ南部で、2004年、
筆者撮影)



図 35 水を入れた半球形ヒョウタンの容器を頭上運搬する少女、
マリ中部で (1988年頃、保坂実千代撮影)



図 36 フランス西部ノワルムーティエ民衆技芸博物館で (1990 年、筆者撮影)

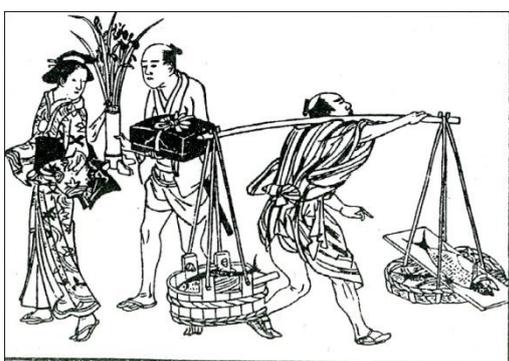


図 37 両天秤で商いをする江戸の魚屋。
江戸市中における四季の風俗を
描いた、山東京伝『四時交加』
(寛政 10 (1798) 年、江戸で刊
行)、四月の部。黒川真道 (編)
『江戸風俗図絵』柏美術出版、
1993 年による。



図 38 両天秤運搬の模式図 (筆者作図)



図 39 腕力ではなく腰を使って漕ぐ日本式の船。
三重県答志島で (1999 年、筆者撮影)



図 40 収穫したブドウを運ぶ背負い籠、
重心を高く作ってある。フランス
東南部ドフィネ地方で (1998 年、
筆者撮影)

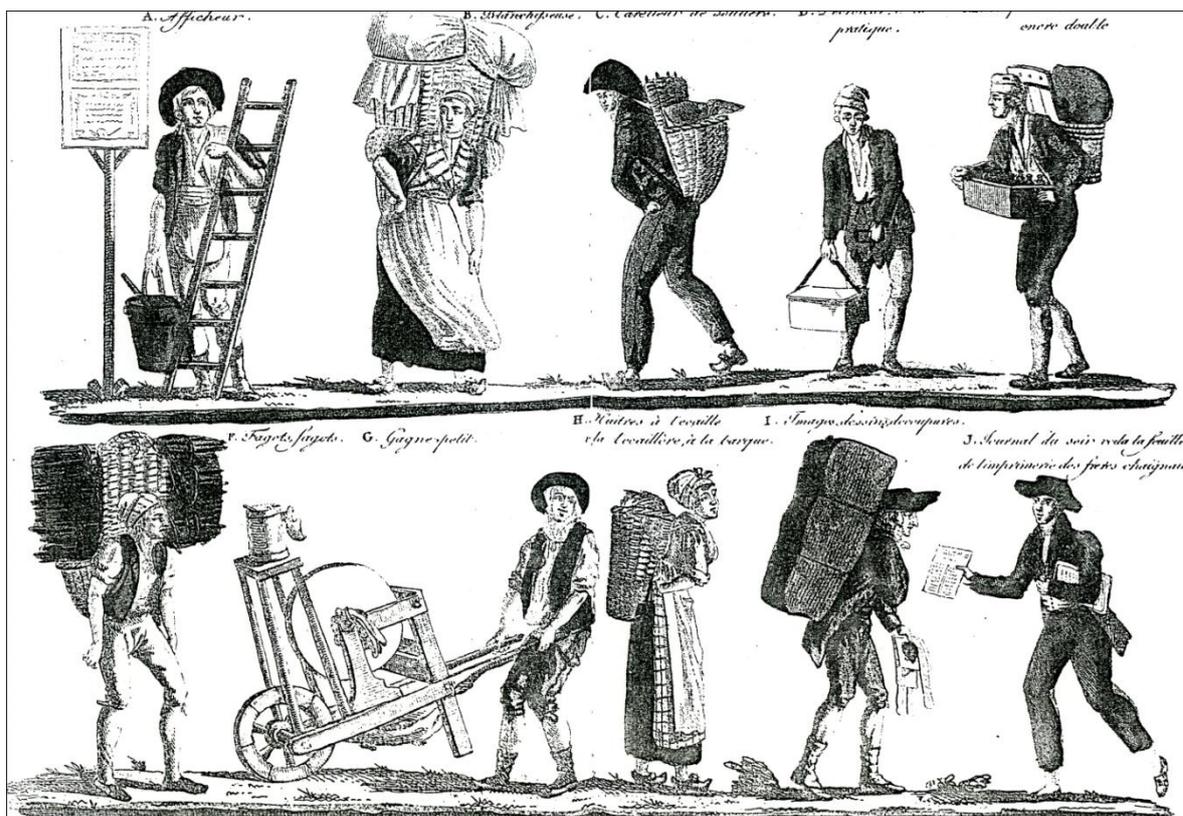


図 41 フランスで背負いの重心を高くした運搬具の様々。第二帝政期 19 世紀中頃のパリの行商など (Massin, 1978 による)



図 42 ヨーロッパで籠編み用に大量に栽培される、ヤナギ科ヤマナラシ属の高さ 2m 余りの草本 (フランス語名 osier) で編んだ、重心を高く作った背負い籠や、前腕に下げる籠。フランス東部アルザス地方。(Raclot, 1979 による)